

國學院大學学術情報リポジトリ

城泉太郎資料(二)：城泉太郎談話

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山下, 重一, 小林, 宏 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001098

城泉太郎資料（二）

―城泉太郎談話―

解題

前号に城泉太郎の自筆日記を翻刻したのに続き、本号には広井一が『北越新報』夕刊の昭和四年六月一日付から七月二十七日付まで連載した『紅秋随筆録』の第一二三回から第一六二回に至る城泉太郎関係資料の復刻を掲載する。この連載の第一二三回から第一三四回までは「五十年前の恩師と語る―明治初年の長岡英学者城泉太郎氏の経歴」（最後の二回の見出しは、「経歴」ではなく「談話」、第一三五回から第一六二回までは、「城泉太郎先生談話余録」と題されている。われわれが城大次郎氏から提供されたのは、その中、第一二三回から第一五四回までの切り抜きであったが、この新聞の原本を所蔵している新潟県柏崎市立図書館に問い合わせたところ、あと八回連載が続いた

ことが分かり、同図書館から八回分のコピーを入手することができた。後に述べるように、この連載の初めの十二回分は広井一が城泉太郎の談話の聞き書きを記したものであるが、以下の二十八回分は、城自身が執筆したものである。

「紅秋」とは、北越新報社の社長であった広井一（慶応元―昭和九年、一八七五―一九二四年）の号である。広井は、長岡学校（現在の新潟県立長岡高等学校の前身）で城泉太郎の英語の授業を受けたが、五十年後に七十三歳で健在であった恩師を訪ねて詳しい回顧談を聞いて、『紅秋随筆録』に書き、その後、城自身の原稿を連載したのである。

広井一は、慶応元年越後国古志郡東山村大字小栗山に生まれ、幼少時祖父と父母から漢学の初歩を教えられ、古志郡濁沢の二十村組小学校に学び、十三歳の時、六日市小学校代用教員を勤めた後、明治十二年、十四歳で長岡学校に入学した。城泉太郎

山下重一
小林宏



昭和 4 年 7 月 2 日撮影・城大次郎氏所蔵

は、前から同校の校長兼教頭になっていたから、「五十年前の恩師と語る」の冒頭に回顧されているように、ギゾー、ミル、スベンサーなどの講義を聞いたのである。彼は、明治十五年九月まで同校に在学した後、同年十月に上京して慶応義塾本科に入学したが、十一月に創立早々の東京専門学校（政治経済科および英語兼修科）に転校し、東京専門学校の第一期生として、小野梓、高田早苗、坪内雄蔵（逍遙）等の講義に出席した。彼は、十八年六月に卒業して帰郷し、片岡勝太郎の長女千代子と結婚し、翌十九年二月には母校長岡学校の教員となり、二十二年まで在職した。この間、明治二十年に全国的に高揚した大同団結運動に参加し、十一月に条約改正反対、言論出版の自由、地租軽減の三大事件に関する中越建白書捧呈委員に選ばれて上京したが、十二月末の保安条例によって退去命令を受け、帰郷の止むなきに至った。

彼は、その後郷土の発展のためにさまざまな事業に従事した。明治二十三年、越佐新聞社を川上淳一郎と共に譲り受け、社名を長岡日進社と改めた。二十六年、県会議員に当選、二十九年、長岡銀行創立に預り、越佐新聞社の常務取締役を辞し、長岡銀行の理事となつて、三十六年には同銀行の支配人となった。四十年には長岡日進社と長岡日報社との合併に尽力し、合併により成立した北越新報社の副社長となり、翌四十一年には長岡銀行の取締役兼支配人となった。彼は、長きにわたつて長岡の実業界、言論界の指導者としての地位にあり、大正十五年、北越新報社の社長となった。彼が上京して五十年前の恩師城泉太郎

と会つて、その聞き書きを『北越新報』夕刊に連載中の『紅秋随筆録』に書いたのは、昭和四年六、七月のころである。彼は、北越新報社の社長として在任中、昭和九年一月十七日、六十九歳で死去した（箕輪義門編『広井一伝』北越新報社、昭和十五年参照）。

『紅秋随筆録』に四十回にわたつて連載された城泉太郎の回顧談の由来を明らかにするものに、広井一（四通の書簡（城大次郎氏所蔵）がある。その第一のものは、昭和五年五月二日付、広井一（新潟県長岡市坂ノ上町二丁目 北越新報社）から城泉太郎（東京府下吉祥寺町一八一六番地 有馬駿介方）宛の次の書簡である。

「拜啓 時下春陽之候、益々御清適奉大賀候。陳者此程は突然御伺申上候処、御面会の栄を得、御高説拜聴、御近況を詳に致し、加ふるに一日御歓待を蒙り、誠に喜ばしき次第に御座候。深く御礼申上候。明治初年の回顧談、一昨年の憲兵署事件の如き初めて承り、大に珍らしく感じ申候。先生の御近況等を知らんと欲する旧門下生も長岡及び県下に沢山散在致し居候間、小生の主管する北越新報に御談話の一端を掲載仕度と存候間、予かじめ御承諾置き願度候。尤も孝明天皇の御事などは決して掲載致さず、且つ憲兵署に御召喚の事も極めて一端を洩らす事に止め、専ら慶応義塾御入学当時の事、四国へ分校教師として御出張の事、大阪鎮台乗取策、副島伯との対話、其他長岡の雑話等を掲載致し、執筆の責任は凡て紅秋山人の名に於て拙者が負ふ次第を明記可致候間、掲載の儀御

承認被下度奉願上候(下略)。」

『北越新報』夕刊の昭和四年六月一日付から六月十三日付まで、すなわち『紅秋隨筆録』の第一二三回から第一三四回まで十二回連載されたのは「五十年前の恩師と語る」と題する広井一の聞き書きである。城の授業の回顧に始まり、昭和二年に城が憲兵隊の取調べを受けたこと、城の生い立ち、慶応義塾で抜群の成績を挙げて教員となったこと、徳島の慶応義塾時代、長岡学校時代のこと、同郷の藤野善蔵、小林虎三郎、雄七郎兄弟のことなど興味深い回顧談が記されているが、徳島時代のことについては、明らかに二年後の高知の立志学舎教員時代との混同が見られる。これは城泉太郎の記憶違いによるものであろう。何れにせよ、七十三歳の隠居の身であった城が、五十年前の教え子に語った貴重な回顧談であるが、『紅秋隨筆録』に城の自筆に成る「城泉太郎先生談話余録」が続いて連載されたことは、この資料の価値を一層高めている。

広井一の昭和四年六月十三日付城泉太郎宛書簡には、「拜啓暑氣俄かに相加候処、益々御健勝に被為渡奉賀候。陳者御繁忙の御中、特に追懐談御執筆被下奉感謝候。拜読非常に面白く拜見仕候。御経歴談は十二回分にて一旦擱筆の積りにて工場へ原稿差廻し候後ち玉稿に接し候間、談話余談として本日より(十四日附けの夕刊)掲載仕候間、続稿御寄稿の程奉願候。(下略)」とあり、末尾に「御説の如く其筋の取締が嚴重につき、小生も充分字句を穩和に致すべく無遠慮に加除訂正致候間、此点御寛恕願度候。」と記されている。

「五十年前の恩師と語る」は、六月十三日付の第十二回で(此項完)として終っているが、翌十四日付の『紅秋隨筆録』第一三五回から「城泉太郎先生談話余録」が七月二十七日付の第一六二回まで続いている。この間、七月二十五日付の第一六〇回の冒頭に、新聞社で掲載順序を間違った旨の「お詫び」の記事があるので、正しい順序に直せば、七月二十七日付の第一六二回の次に第一五九回が入り、ここで完結し、「談話余録」は二十八回にわたったのである。

広井一の六月二十三日付書簡には、「御寄贈被下候玉稿中の濟世危言の序文は乍失礼省略致候。実は当時漢字制限の結果、漢字の要意乏しきと文撰工は初年者のみにて漢文の素養なき為め、之を拾ふ事容易に無之、誤字脱字多くして到底完全の文章を撰字する能はず、玉稿を傷け候事と可相成恐れ有之につき、寧ろ失礼ながら前以て略し候方宜しきかと考へ、専断を以て玉稿中を省き申候間、此儀不悪御寛恕願上候。」と記されている。これは、『紅秋隨筆録』第一四五回(六月二十五日付)の小林病翁(虎三郎)の闕字の訓戒に関する記事に、城の訳書「濟世危言」(明治二十四年)の序文の部分が略されていることと関係している。このように多少の削除訂正がなされたといえ、「談話余録」の多岐にわたる回顧録は、城泉太郎自身が執筆したことは明らかであり、明治初期の慶応義塾や高知を中心とする自由民権運動、維新前後の長岡藩の状況等に関する極めて貴重な資料である。

『紅秋隨筆録』の切り抜き(ただし終りの八回分を欠く)は、

城照雄氏（大次郎氏の嚴父）から昆野和七氏に提供され、昭和十四年五月に作成された写本が現在国立国会図書館に所蔵されているが、この写本は、憲政史関係と土佐時代関係のものだけを抜萃したものである。われわれは、前号と本号に城泉太郎日記と『紅秋隨筆録』の城氏に関する部分の全部を収録することができた。この貴重な資料を快く貸与して下さった城大次郎氏の御厚意に心から御礼申し上げ、今後城泉太郎の数奇な生涯と業績を更に明らかにする努力を続けたいと思う。

凡 例

一、本稿は、広井一が昭和四年『北越新報』夕刊紙（新潟縣柏崎市立図書館所蔵）に『紅秋隨筆録』の一部として掲載した、城泉太郎の談話録を復刻したものである。

一、談話録は二部に分かれるが、復刻に際しては、その前半部の表題を「城泉太郎先生談話」とし、後半部の表題を「城泉太郎先生談話余録」とした。

一、第一六〇回（「談話余録」第二六回）の冒頭には、「係」の「お託び」として、「本項は『城泉太郎先生余録』の二四回以後に続くものであったが、編輯者の手違ひから順序を前後してしまつた。偏に筆者及読者にお詫する」という注記がある。この注記に従つて掲載の順序を変更した。

一、誤字、脱字等は、その右傍に括弧を以て注記し、明らかな誤植は意を以て改めた。

一、難読の漢字には振り仮名をつけ、漢字は常用漢字を用い、且つ句読点を適宜付した。

一、談話の各標目等の上に記した数字は、上段が談話録の、下段が『紅秋隨筆録』の通算番号（共に『北越新報』に掲載）である。

城泉太郎先生談話

1 [123] はしがき

此程上京の折、或る機會から五十年前の恩師、長岡出身の城泉太郎氏が府下吉祥寺町に居らるゝことを知り、敬慕の念禁じがたく同氏を訪問し、久闊を叙した。

○

城氏は明治十一年に長岡学校の教頭として赴任せられ、筆者は同十二年に同校に入学し、十五年の夏迄、同氏の教訓を受けた一人である。氏は当時二十三歳の美男子で頭髪を櫛目正しくまん中より左右に分け、絹紬の羽織、仙台平の袴といふ扮装にて構内の校宅から鷹揚に昇降口に上り、講堂に臨まるゝ時は咳一つする学生なく、一同先生に敬意を表したものだ。先生は麥則読みではあったが、英字には頗る堪能の人で、ギゾウの文明史とかミルの代議政体論、スペンサーの教育論などを講義せられる時などは流暢の弁舌に抑揚あり、加ふるに解説に巧なる為め学生をして恍惚たらしめた。筆者もその後、慶応義塾にて高

島小金石治先生、東京専門学校にて高田早苗先生、坪内雄藏先生等の英書の講義をも聴講したが、失礼な申し分ではあるが、城先生の講義が一番好かった様に思はれた。

○

城先生は学生の主催にかゝる和同会と称する弁論会にも時折出席して科外講演を行はれた。フランス革命史の一節、ロシア虚無党の一節とか生物遺伝論とか万物進化論に関する一節などを講演せられ、演説美辞法等の実際指導を為し、兼て高尚なる学理を通俗的に解説し、幼年の学生にまで新知識を注入せられた。曾て記叙したこともあるが、十三年の頃、「私擬憲法草案」と云ふ慶応義塾同人間の起草になる憲法草案の写本を持参し、学生にこれを研究討論せしめた程の突飛なる教育家であつた。

○

小学校や中学校時代には、生徒の頭脳に最もふかく先生の教訓が刻め込まれる者であるが、筆者も四年間、長岡学校にて城氏の教育を受けた者であるから、常に思ひ出しては居れど、久い間、親しく面談の機会がなかった。幸ひにして此日、先生も在宅あらせられ、数時間談話することが出来た。さて久振りの面会であるが、先生旧時の温容は少しも変はらず、鏗鏘として仕者を凌ぐの元氣あり、能く酌み能く談じ、感興滾々として尽きず、城家の歴史を語るものあり、先生の経歴を語るものあり、明治初年の英学者、巡回政談演説の元祖、大阪鎮台奪取の計画、副島伯推戴計画、家宝虎の皮の陣羽織の話、崇徳館の応命説、河井氏より受賞の談等、何れも耳新しく聴き得たれば順序を追

はず概要を掲ぐることにする。素より酒間興に乗じての談なれば語る人、聴く者、一々筋道を追ふて書くことも出来ず、又之を世に紹介することは城氏の平素奉ずる老荘の主義にも多少反する嫌ひあると虞る故に、城氏は頗る迷惑に思はれ居られんと恐縮する。然し文筆の責任は筆者にあることにつき、読者、此点御諒解を乞ふ。

2
(124)

陰謀の嫌疑

御聞き及びかも知れないが、昭和二年八月一日、自分が震災後、淀橋から矢口村へ移住した時の事であつた。東京麴町の憲兵隊から故長岡の総督河井継之助の事蹟につき聞きたいことがあるから出頭する様にと云ふ召喚状が来た。今時何の為に河井氏の事歴を調査する必要があるか不審に堪へなかつた。且つ自分は十数年退隠し、世間とは没交渉で、日課とし昼夜読書に耽るのみである。殊に近來は老荘の虚無寂滅主義、エビカラガスの世に知られぬ、人に見られないと云ふ虚無主義を堅く奉じ、世がどうならふと我れは我れたり、好きな書物さへ読んで居れば夫で満足して居るのだ。然るに聞く人もあるべきに、此隠君子を召喚するとは憲兵隊も物好き位に考へて出頭して見ると、河井氏の事蹟を聞くことは附たり取調べて本筋は他にあるので、実に驚き入った次第であつた。之が為め長岡出身の小西信八、橋本圭三郎、田中浪江の諸君までにも御迷惑を掛けたことを後に聞き及び頗る恐縮した。

○

河井繼之助氏を知つて居るかと思はるゝから、戊辰の戦争は自分も少年隊として従軍した者である、河井總督は公武一和の主義を持して終始奔走せられたが、遂に此意見が容れられずして、薩長の軍に抗することとなつたため、自分は其時に於ても河井氏の主戦論に賛成して居つたが、今日に至るも尚ほ且つ河井氏を崇拜し礼讃して居る、従つて薩長と云ふ者は我輩の敵で、生れて七十五年間、薩長藩閥政府の下に一日たりとも衣食の給を仰いだことがないと大氣焰を挙げた処が、先の聞かんとする所は此点にあらずして、不可思議にも此隠君子が首領となり、長岡を始め東北各藩の志士を糾合し、戊辰戦争の雪辱戦争を為すべく大陰謀を計画して居ると云ふ話であるが、夫はどうかと云ふ訊問で、拙老も是には驚いて昭和の御代にしかも隠居の自分が何の実力あつて其様の陰謀が出来ますか、自分の性格、實際生活状態等は是々の友人に聞いて呉れゝば判明する、又疑ひあらば家宅搜索でも何でもなさねえと陳述したれば、取調の結果、帰宅を許されたが、危く頓だ災難に罹らんとして免れた。憲兵隊にても深く同情を寄せられ、晩景になつたこととて片田舎の矢口村自宅まで憲兵三人案内して送つて呉れた。

○ 十数年前、小石川に住居して居つた時、戯れに人糞取りの農夫に、人糞の汲み取り人が家主に金を支払ふなどは間違つてゐる、お前たちが同盟して汲み取をやめたらば家主は降参するに違ひない、其時は却て家主から金を出して汲み取りを願ふであらう、一つ罷業同盟をやつて見てはどうかなと擲擲かつたこと

があつたが、又自分は土地固有の主義を以て居つたことがあつた。ソナことから自分が危険思想の持主であるかの如き考へを起された様だ。然し今回嫌疑事件は思想問題等でなく、薩長政府方に対し戊辰戦争の復讐戦を為すといふ大謀叛の挙兵行動を取るといふにあるから、実に驚かざるを得なかつたが、此隠居老人も一時、憲兵隊を騒がせた珍事があつたよと大笑せられた。

3 (125)

家宝虎の皮の陣羽織

自分の祖先は大坂陣の頃、徳川氏の直屬臣下であつたが、後牧野備前守の臣下となつた者だ。長岡藩士となつた頃は河井の姓を名乗り、父は河井喜兵衛と云ひ、其後、城と姓(改)した。自分實際の年齢は安政三年生れ、七十四歳であるが、父の跡目を相續するに当り、年齢が不足では都合が悪いとあつて、一年掛けて安政二年の生れと戸籍掛りが氣を利かして届け呉れたため、今日では七十五歳と云ふことになつて居るが、前申す通り実は安政三年の誕生であつた。

○ 我家の宝物に虎の皮の陣羽織がある。之は大阪陣の時、徳川氏より拝領した物で大切に保存して置くが、毎年藩士が年賀の祝礼に殿中に登城する時、我家長は此拝領の陣羽織を着用して出掛けるのである。同僚が此陣羽織を畏敬する計りでなく、君公も当日丈は此陣羽織に対して敬礼を払はれたものだ。我家の祖先が徳川家の直屬の臣下であり、長岡藩に帰屬しても客分格

の取扱ひを受けた者と思はれる。

○

虎の皮の陣羽織は軍功に依つて得たる金鶏勲章の如き物であり、又新年拝賀の日には君公と雖も、敬礼せらるゝと云ふ特権があるので、此陣羽織は藩中一般の尊崇敬信する所となり、偶^{たま}々家内に瘡疾に罹る者があると、虎の皮の毛を二三本宛所望し、之を煎じて薬用に供したもので、何百年か長歲月を経過してあるに年々毛をむしり取らるゝので、今は只形状を存すると云ふ迄の物だ。然し数百年間、人々の敬崇信仰の的となつた陣羽織であるから、家宝として今日大切に保存して置く。

河井氏より誕生の祝歌

自分の家も河井を姓として居つたが、單に同姓と云ふ許りでなく、河井繼之助氏の家とは縁家続きであり、始終往復して居つた。自分が安政三年に生れた時、河井氏は非常に喜ばれ、父にあて左の歌を寄せ、前途を祝福して呉れた。

虎の子と愛し玉ふもことわりや虎の代りの世嗣ぎなりしを

誕生の時、右の祝歌を寄せられた程であるから、自分が少し物心が付き始めると、河井先生は痛く自分を寵愛し訓告する所あり、子供心にも河井先生に心服する様になつた。

4 [126]

河井氏の扇面を賞典に貰ふ

自分は藩の設立にかゝる崇徳館と云ふに入り漢字を学んだ。学校は現時の追ひ廻し附近にあつたが、先生は都講と助教とあ

り、都講は平日は教授せず、月何齋と云ふ様に日を定め、生徒から質問を受けることになつて居り、都講の下に助教があり、専ら經書の素読をしてゐる。藩の教育は家老の中に文武係があつて統轄して居つた。学問の方では時に家老が親しく試験を行ふことがあり、之を内聴^{うちき}と云ふて居つた。又藩侯が江戸から御帰藩になると、必ず召されて講義素読を命ぜられるのは是を応命説と云ふてあつた。応命説は大抵突然、何の書物、何の章を講説せよと命ぜらるゝから、平素勉強し又優秀の才を有する者でなくては及第することが出来ない。

自分は十一歳の時、応命説を命ぜられ、大広間に君公家老方を始め諸士列席の前に出て受験したが、幸ひに及第し大に面目を施したことがあつた。其時、金子式朱と河井先生が蘭語にて御書きになつた扇子壺対を褒美として頂戴した。戊辰の役に河井先生の揮毫にかゝる蘭語の扇子を紛失して今日形を留めざるは返すくも遺憾の次第である。

大鼓叩きを捕虜とす

長岡軍の方でも捕虜となつた者もあつたから、薩長軍にした処で捕虜となつた者も少くなかつた。長岡軍の何隊かは判らぬが、長州軍の玉置某^{たまき}と云ふ十五歳位の大鼓叩き、即ち少年鼓手を生け捕つた。此玉置少年は中々活潑の少年であつて、捕虜となつても少しも怯るまじ臆せず、自分は官軍だ、長岡は賊軍だなど大口を叩き、長岡勢を罵倒することもあつたが、然し玉置は無邪氣の少年で其云ふことも人に悪感を与える様のことみな

く、敵ながらも可愛がられて居った方であつた。

長岡の戦ひ敗れて藩士が殿様に随伴して会津へ落延びたる時、少年組の自分及び渡辺敬太郎は若殿牧野鶴橋様に御伴して会津地方へ逃げ、捕虜の玉置鼓手も共に連れて同行したが、仙台上に滞在中の事であつた。仙台藩も降伏した、会津藩も降伏した、長岡藩も弥々九月廿三日に降伏したと云ふ悲報が軍営に達するや、彼れ玉置は捕虜の身をも顧みず、手を叩いて快哉を叫んだ。此時、我々の憤慨は絶頂に達したので、渡辺とも申合せ、己れ憎き玉置かな、今度は用捨出来ぬ、覚悟せよと刀に手を掛くるや、故陸軍中將豊部新作氏の敵父は我等兩人を大声叱咤し、何馬鹿騒ぎをするか、今や我藩主は降伏し、其罪を官軍に謝することとなつた、然るに平和に帰したる今日、假令玉置が長岡軍の降伏を聴き、手を拍って喜びたりとも、之を斬殺すが如きことあらば後日において如何なる面倒な事件が出来、するやも知れず、兵火収まり平和の時が来つた今日、無謀の拳を堅く握めよと散々叱られました。敵の捕虜ながら玉置は却々有望の少年であつたが、そののち病氣に罹り名を為すに至らずして夭折した。

5
[127]

藤野善藏氏より英語を

長岡中学校の前身、長岡洋学校を明治五年に創立し、其教頭として英学を教授し、長岡に洋学や泰西の文化を輸入した恩人藤野善藏氏は長岡藩の出身者で慶応以前から江戸へ遊学し、先づ箕作秋作氏に英語を学び、後ち慶応義塾に入り英学を修め、

同塾に教鞭を執り、小幡篤二郎氏と比肩する程の勢力を占めたる同塾の先輩であるが、氏は自分と縁戚関係のあるより慶応二年、長岡へ帰省したる時、自分に英学研修の必要を説き、英語綴りの単語篇から教へ始められたので、他の人より早く英学に興味を有し英語を理解することが出来た。

○

藤野氏の学歴や長岡洋学校に尽きたことは今更改めて説く程のこともないが、河井先生が横浜から機関銃を始めて長岡藩に輸入し、其訓練を為さんとせられた。其時始めて見るところの精巧緻密な機関から組立られてあるので、誰ありて之を回転する方法を知らなかった。其處で英学者の藤野善藏氏に依頼し、英書に依りその説明書を翻譯して貰ひ、漸く実用に供し、戊辰の役に長岡藩の兵器が優秀なることを各藩に誇ることが出来たのは藤野氏の英学が与つて大に力あつたことである。

入軽井の塾に入門

自分は十三歳の頃迄、崇徳館にて経書の素読や講釈などを習つたが、同館も戊辰の役と共に閉塞せられ、戦争止んで後も学ぶべき学校が長岡にないから三島郡の入軽井村にある遠藤軍平氏の塾に入った。当時、県下で有名な塾は北蒲原郡聖籠村の大野恥堂氏の塾、西蒲原郡粟生津村の鈴木文台氏の塾、刈羽郡南條村の藍沢南城氏の塾、三島郡河根川村の青柳剛齋氏の塾、それに此入軽井村の遠藤軍平氏の塾位に過ぎなかった。自分は遠藤氏の塾を選び、同塾に入ったが、多少の素養がある所から

だが忽ち塾頭に拔擢せられた。

慶応義塾に入る

然し考へて見ると、田舎の漢学塾に居つて塾頭位して居つた所で末が案じられる。時勢は騒々として進み、泰西の文化は滔々として我国に輸入せられて来た。今より志を立て東京に出て、日新月歩の学問を為すに如かずと深く決心する所あり。

明治三年、十五歳の春、三国峠を踏破して上京し、三田の慶応義塾に入り福沢先生の門下生となった。自分は藤野善藏氏より英語の手解きをして貰つたので、義塾に入つてから英学も進歩が早く敢て秀才といふではなかつたが、明治三年に入塾して五年の暮に教員に採用せられた。先づ異数の拔擢といふべきである。犬養毅、尾崎行雄、大石正巳の諸君には自分が先輩として英書を教授した。当時の城泉太郎は随分羽振が好かつた者だ。

6
[128]

阿波の自助社から招聘

阿波の徳島に志士、井上高格といふ人が学校を興し、政談社を設け、民心の鼓舞作興に努められた。土佐には板垣退助氏ありて頻に自由民権の論を鼓吹せられた。板垣氏は中村敬宇先生の西国立志伝を読み、感ずる所ありて立志社といふを設け、洋学所を開き、法学所を設け、盛んに民権自由の論を鼓吹した。阿波の井上氏もこれに対抗し、中村先生の西国立志伝は原名セルフヘルプで、これを西国立志伝と訳し、土佐ではこれに形取り、立志社と命名したから、阿波ではセルフヘルプの直訳は自

助といふべきであるから、自助社と命名して一社を設立し、土佐の立志社と相対抗して当時の先覚者を糾合することに尽力した。

慶応義塾の分校設置

阿波の自助社は以上の如くにして井上氏等に依つて起されたが、何を差置いても人材の養成が急務であるとなし、明治八年に自助社では阿波に慶応義塾の分校を設け、英学を始め泰西の学問を子弟に教育する方法を取つた。それで八年、開校當時には、義塾より矢野文雄氏が校長として二三の助手を引連れ赴かれたが、矢野氏は翌九年に帰京することとなつたので、その後任として自分が赴任することとなり、門野幾之進氏と共に明治九年の春、阿波へ出掛けた。自助社でも大奮発で五年に漸く義塾の教員となつた許りの自分に校長として月給百円を支給せられた。藤野善藏氏が明治五年、長岡洋学校教頭として赴任せられた時、月俸百二十円の高給を取られたと云ふことは随分評判であつたが、白面の書生上り自分が月給百円を受けたことから思ふと、藤野先生の百二十円の俸給は当時としては寧ろ低廉であつたと思ふ。

訂正 紅秋隨筆録、第二百二十五回、五十年前の恩師と語る(三)の河井氏より誕生の祝歌を「虎の子を愛し玉ふもことわりや虎の代りの世嗣なりしを」を「虎のかはゐの世嗣なりし」と訂正す。六月三日附にて城先生より、新聞御送附被成下難有奉存候、和歌の下句の虎の代りではなく、「かはゐ」に候、即ち河井と

可愛と虎の皮との三ツをかけたものと思はれ候云々の芳翰に接したれば茲に訂正す。筆者曰く、城氏の誕生当時は城氏も河井の姓を名乗られたれば、旁々虎の「かはる」の文字を河井繼之助氏が祝歌に用ゐられたるものにて、玩味すればます／＼意味深長なるを覚ゆ。

7 [129]

演説が主で教授は從

板垣伯が廟堂を退き、土佐に隱退せられてより立志社を設け、演説会を各地に催し、又雜誌を発行したりして国民に政治思想を吹き込むことに尽力せらるゝより、阿波の自助社連も之に負けず、演説に文章に盛んに民心の奮起作興を宣揚した。当時、板垣伯の演説も聴き、又演説壇上に立ち、共に演説した時もあったが、立志社の先生方より自助社連中の方が却て演説が上手であった。当時、自由民権の論が漸く四国に萌芽を出し掛けた時であつたので、有志者は何れも天下の志士を氣取り、東西に奔走し、演説会を開いたり、集会を催したりして席の暖まる時がない位であつた。斯の如き時勢であつたから、自分の如きも、自助社の講堂に居るよりも各地の演説会に臨む時の方が却て多く、生徒の授業は二の次位に考へて居つた。

大阪鎮台奪取の陰謀

西郷南洲が明治十年に大兵を率ぐるや、土佐立志社の林有造、大江卓、谷重喜、岩神昂等諸氏は同志を四方に募りて密に西郷の挙兵に応援せんとし、阿波の井上高格、紀州の陸奥宗光と秘

密裡に通謀し、大阪の鎮台兵は鹿兒島の討伐に出向き全く空虚となりたれば、其空虚を襲ひ大阪鎮台を乗取り、前後より官軍を挾撃すること亦快ならずやとて、林有造氏は清国上海在住の商人より三千挺の銃器買入れの約束を為し、其受取りの爲め東京へ出張し、密輸入の謀を運らすあり。又陸奥氏は元老院幹事たりしより元老院の暗号電信帳を窃に取り出し、之を林氏に渡し同志の間に自由に使用せしむる等、着々陰謀は進捗しつゝあつた。外交家として絶倫の技倆を認められた陸奥宗光氏ともあろう者が假令現政府に不満があつたにしても、身は元老院幹事にありながら西郷南洲翁に加担して、土州の有志と共に兵を率ぐるなど云ふ無謀の計画ありとは殆ど信することが出来ない程であるが、智者も迷ふ時は常規を逸することが間々ある者と見え、陸奥氏も仲間入りをしたことが政府の探知する所となり、所在に隱蔽貯藏せる兵器は押取せられ、又刺客の任に当りし岩神昂氏等は捕縛せられ、陸奥氏も罪状明白となり、拘引せらるゝと云ふ大騒動が突発した。

8 [130]

四国に晏如たる能はず

我々阿波の自助社の社員も、社長井上高格氏を始め重なる社員は土佐の立志社々員と連絡を取り、又紀州の陸奥氏とも氣脈を通じ相往來して居つた為め、警視庁の探偵眼は鋭く四国に光つたのみならず陸軍側にも頗る警戒する所あり。地方有志と称し自助社又は立志社に加盟し、巡回演説などを鼓吹した自分共も多少謀議に参加して居つたので、始終探偵が尾行すると云

ふ有様にて、全く陸奥氏や林有造氏等の連累者と目されたから阿波に止まることが危険になって来た。夫で東京に出て副島種臣氏に面会し、土佐の立志社を改造し、更に愛国社を再興し、板垣伯の代りに副島氏を其首領となし、東京に於て一旗挙げんとの大希望を抱き副島氏を説得すると云ふ口実の下に上京した。処が神戸、大阪、天津、到る処に探偵が付き纏ひ、又警官が厳重なる訊問をする等、其旅行は至つて不愉快にして危険千万であつた。

○

天津にて或る旅館に自分が風呂から上り、浴衣のまゝ何気なしに寝転んでみると、隣の部屋に三四人密々話して居る者があつた。自分は其何人なるかに気付かず居ると、極めて横柄に威丈高になつて先方から自分共は警視庁の高等官吏であるが、我等の前をはゝからず横臥して居るとは無礼千万であるなどと大に威張つたもので、此時程、自分の癪に障つたことはなかつた。然し自分も大望を抱く者、彼らと争ふも詮なきことにつき、一応自分の立場を明らかにし、事なく納まつたが、実に官尊民卑の時代として警官の威張つたことは実に甚だしかった。

副島伯の大言壯語

四国を辞して東京に上る時、板垣伯に面会し、且つ副島伯を御尋ねする意思あることを告げた時、板垣伯は自分に注意を与へられた。君が副島伯を訪問して意見を陳述するは宜しいが、副島伯は大言壯語して容易に要領を得た談話をせない人だ、君

は副島伯に將來政治界に乗り出す様に勧誘する意見らしいが、君の如きは忽ち煙にまかれて仕舞ふであらう、余程此方から度胸を定め副島伯が何を云ふても驚かない覺悟が大切であると呉々も注意を与へられた。

○

扱上京するや直に刺を通じ、面会を求めたるに快く引見して呉れた。自分は来意を語り、自由民権拡張の爲め政治運動の必要なるを力説し、且つ土佐の愛国社を改造し、伯を其首領に推戴せんとする希望を有する者で、同志とも語り合ふて上京したる旨を詳述した。伯は自分の説明を聴き終ると、言下に昨日迄の元老院幹事、今日縲紲の恥しめを受く、只天地に向つて大笑するのみと陸奥宗光氏の無謀を冷罵せられた。此一言を聴き、是なる哉と板垣伯の注意を思ひ出し、再び伯を推戴することを言外に出さざりしが、伯は自分に対し種々忠告せられたれば自分としては将来、政治運動を為すことを思ひ止まつた。

9
(131)

長岡に帰り教育に従事

阿波や土佐に居る時は政治運動が主であり、西郷隆盛氏を応援するとか大阪鎮台を乗取りて国乱を起すとか云ふ不穩の計画に参加して居つた爲め、嫌疑は濃厚になり、国事探偵は尾行すると云ふ不愉快千万の境遇に陥り、一時東京へ脱出しても政府のスパイは身邊を離れないし、新聞探訪者は根掘り葉掘り事件を聞き出さんとして聞々新聞記事の材料に供せらるゝことがあり、殆ど困り果てたる処から、郷里の長岡に引込み専心教育に

従事したならば知人も多いことだから却って愉快に月日を送らるゝであらうと考へ始め、遂に一大決心を為し、明治十一年の八月か九月かに長岡へ帰ることにした。

○

此時、長岡洋学校の創立教頭たりし藤野善藏氏は明治六年の末、新潟県令楠本正隆氏が長岡洋学校を廃して強制的に新潟学校の分校たらしめたるに憤慨し、藤野氏は中途解約の上、東京へ帰られたが、明治十一年七月に至り経費の節約を要する必要上、県庁の方針又々一変し、県立の分校を廃し各校とも従前の如く独立の中等教育を施すことを許可することとなつたので、学校組合にては藤野先生を再び教頭に迎ふるの交渉を開始し、同氏は十一年の五月、聘に応じ再び来任せられたが、氏は多病の質として永く北越の寒地に止まること出来ず、同年十月、教職員生徒に惜しまれつゝ東京に帰られたので、藤野先生の推薦もあり、前記の事情も胸中に往来して居つたから、自分は九月から藤野氏に代つて教鞭を執ることとなつた。

10
[132]

藤野善藏氏洋行を辞退

城泉太郎氏は尚語つて曰く、藤野善藏氏は東京御茶の水に建設せられた高等師範学校の設立主唱者である処から、同校でも藤野氏を優遇して居つた。或る年、藤野氏が習ふた最初の英語の先生で現に高等師範学校の校長である箕作秋坪より藤野氏に海外見学を勧められたが、藤野氏は官費を仰いで洋行することを好まずとあつて、之を固持した結果、矢張り慶応義塾から高

峰秀夫君が代つて行くことになつた。藤野氏が師範学校に教鞭を執つて居られた時の事を小西信八君が能く話すが、藤野氏は極めて謹厳の態度にて教場に臨まれたが、生徒は藤野氏の厳肅なる教授振りには一同が怖れを為して居つた。藤野氏は別に生徒を叱る様子はなかつたが、前日に下詠を命ぜられてあるにも拘らず怠慢に附して調べずに居るとも、眼鏡越しに見ながらネクストと云はれる時は何とも云はれぬ慚愧の念に打たれ、長く藤野氏のネクストなる語が心頭に沁渡つたと云ふ話をしられた。

○

藤野氏は独立自治の精神を眞に愛し、学校の独立自治に依つて人の自由の精神が発揮する者であるとなし、氏が先に長岡洋学校の教頭として赴任せられて間もなきことであるが、同校は楠本縣令に依つて新潟学校の分校とせられ、県庁の役人の支配を受けることとなつたので、藤野氏は憤慨止む能はず、断然職を抛つて帰京したと云ふ程の人で、学校の如きも飽迄私学制度で進むのでなくてはだめだと云ふ堅き信念を持つて居られた。

自分は河井総督の公武合体、公武一和の論に賛同して居る者で、飽迄も薩長の専横暴派を排撃する者であり、今日に至るも尚ほ此議論を確守して居る者だ。敢て喝しても盗泉の水を飲まず、飢ても薩長の粟を食はずと云ふ程の絶対強硬意見を有する者でもないが、兎に角、薩長政府の手から直殺に俸給を受け、之に依つて衣食住を支ふること又は衷心から喜ばない。故に今日七十四歳に及ぶも、官費生活をやったことはない。先にも言

明してあるが、自分が長岡学校に教頭となつてをたつたときに、新潟県令永山盛輝といふ人から分に学校の校長兼教頭の辞令を事務掛の沢彦弥氏の手から渡された。そのとき自分は憤然として何の県庁の役人共から辞令など頂戴する縁因がないとして沢事務掛の面前にて辞令書を寸断にして投捨てたこともあつた。

11
[133]

小林病翁兄弟土佐へ

話しは少し前に戻るが、板垣伯等の主唱になつた立志社のことは前に話したが、此立志社にあつて政治論壇の牛耳を執つた人は長岡出身で慶応義塾出の小林雄七郎氏であつた。氏は当時月俸百五十円で招聘せられ、同地へ赴き青年に對し政治経済法律に関する學問を教授し、傍ら演説の稽古などを奨励せられた。

○

小林雄七郎氏が土佐に根拠を構へ、地方有力の士となられたので、長兄の小林虎三郎氏も長岡の岸宇吉氏方の厄介を辭し、土佐に赴き暫く舍弟方に仮寓せられた。偶然の事ではあるが、土佐に小林兄弟、阿波には自分と云ふ様に長岡人が四国の民権自由の拡張に先鞭を着けて居つた。

小林虎三郎先生

小林虎三郎先生は佐久間象山門下の二虎と云はれた程の有識者で、長岡に於ける近代の偉人であるが、氏は終世独身生活を続けられた。然し全くの無妻主義者でもなかつた。自分とは親類続きであつた。自分の叔母を妻に欲しいと所望せられたこと

があつたが、不幸にして縁談は成立しなかつた。尤も小林氏は多病で、夏でも綿入の重ね着をして尚ほ寒いと咬くはいて居られた程であつた。

○

小林病翁先生が長岡藩の大參事となられた頃であつた。貢進生を推挙して東京に遊學せしめんと自分を推挙せられた。然し自分は小林先生と親戚の間柄でもあり、且つ藩士に中島武藤太氏として兄弟三人も戊辰の役に名譽の戦死を遂げたる殊勲の家があるから、自分は其推挙を辭し中島武藤太氏を推挙することに努めた。処が四年に廃藩置県の令が布かれたため、貢進生のことも沙汰止みとなつたは惜いことであつた。

渡辺久馬八氏の大膽

榎武氏、榎哲氏の叔父に渡辺久馬くま八と云ふ人があつた。此人は漢學者渡辺庄助先生の養子となつて渡辺と改姓した人であるが、戊辰戦争の時、彈丸が顔面を冒し、遂に一眼を失ふに至つた人だ。氏は一眼を傷つけられても少しも怯まず、手拭てふしを以て傷所を掩おほひ奮戦したと云ふ勇士で如何にも活潑であり、又極めて大膽なる人で、ドンナ事が起つても周章狼狽する様のこともなく恐懼する様のこともなかつた。此渡辺久馬八氏が嘗て長岡藩の人物を評した事があつたが、其当否は暫く置くとして、氏は評して云ふには河井繼之助氏は豊臣秀吉公だ、国手の小山凌雲氏（河井氏と最も親密の交際を為し、河井氏が兄として敬事し、朝夕訪問して意見を叩きたる人にて河井氏の參謀長）は頼

朝公だ、村松忠治右衛門氏(河井氏の腹臣で會計に長じたる人、勘忍力強く曾て怒った顔を見せたことなき人)は徳川家康公だと賞讃して居られた。渡辺氏は慶応義塾の学僕から身を起し、義塾の教員となり、地方中学校の教員となつた豪傑肌の先生であつたが、既に黄泉の客となられた。

12
(134)

小金井儀兵衛氏の鼻歌

元代議士小金井樞三郎、医学博士小金井良精両氏の敵父小金井儀兵衛氏は河井蒼竜窟大の崇拜者であるが、此儀兵衛は如何にも太腹の人で、他人が何を云ふても少しも氣に掛けた様子がなく、何時もニコ／＼して應對して居る人であつた。然し若し何か癪に障ることがあると、鼻歌を謡ふて齷を晴らして居ると云ふ人で小金井の鼻歌は有名のものであつた。

河井氏不意を突く

河井繼之助先生は時々人の意表に出でたことをして驚かす人であつたが、此事が果して人の度胸を試めす為めの方法であつたか、但しは場合に依つては実行せんとする者であつたかは判然せざりしも、戊辰役直ぐ前頃のことであつたと聞くが、或時、自分の父喜兵衛と友人の小板部貞吉氏(元長岡学校の教員たりし小板部勇吉氏の敵父)と密談して居る処へ突然河井氏が入り来り、河井氏は昔し福島正則の所持せる名刀の小柄刃渡り七八寸の物を突然、小板部の咽喉目掛けて突き刺さんとしたるので、小板部氏は常に氣界丹田の修養に意を用ゐたる人として驚くべき

かは、小板部氏は励声一番、「河井何をするか」と叱咤すれば河井氏も其俛手を引き、両者の間事なきを得、後は笑つて別れたと云ふことである。河井氏は小板部氏が藩論の軟化を計り、敵に款を通ずるなきかとの疑團を起し、さては憤怒の念に駆られ此挙に出でたる者なりとも云ひ、又只度胸を試したる迄なりとも云ふが、兎に角、小板部氏が泰然自若として驚かず、且何等意思の変りたることなきを知りたれば、両者の間、意思疎通し笑つて相分れたりとはいふ度き話である。

○

城先生の談話は頗る多岐に亘り、一々之を紹介することが出来ないのを遺憾とする。先生が明治十一年九月、長岡学校の教頭となり、学校に於て生徒に科外講演をしたり、校外に於て六十九銀行の岸宇吉氏等の為め時々演説会を催し、時には楠公權助論に氣焰を挙げて藤野友徳氏等の反対を招きたることや、明治十六年四月に長岡学校を辞して上京し、土佐出身の政治家林包明氏等の設立した某私塾に教鞭を執り、又新潟県自由派系の清水治吉氏等の主催にかゝる自治会の巡回講演会の講師に聘せられ、来県再び政治界に雄弁を揮はれたが、意見合はずして東京に帰来せられたる事等々、記すべきこと多きも茲に筆を止むることとする。(此項完)

城泉太郎先生談話余録

1 [135] 城先生の談話は、第十二回を以て一旦打切ることとしたるも、城氏経歴の裏面史とも云ふべき一種ローマンチックな話も酒間の興に乗じて話されたれば、談話余録として掲ぐることにせり。先生極秘の内証話なるべく、之を素破^{すば}抜くは御迷惑かも知られど、文責は拙者にありとして之を紹介せん。

花柳街に遊ぶ

明治九年三月、城氏が阿波徳島の慶応義塾分校の校長として赴任するやうになつた事に就ては、其処に内面に伏在する或る珍談秘話がある。少く其事情を語ることとする。夫は別事でない。一言以て云へば、城氏が福沢先生に敬遠策を取られたのだ。悪く云へば、青年陽気に任し、芸者遊びを為した事が一原因であつたやう思はれる。城氏は、五年の秋から福沢塾の教師をして金が取れる。独身だ。そこで六年の暮頃からそろ／＼芸者買を始めた。当時三田附近の金杉に河原崎座と云ふ芝居場があつて、之は河原崎権之助、即ち後の団十郎の爲め設けた劇場だが、其座付の芸者を相手にして、城氏は折々遊び騒ぎ、時に或は団十郎、即ち当時の権之助と芸者の競争をしたこともあつたが、場末の金杉くんだりで遊ぶよりも、東京の中央とも云ふべき新橋の金春か又は両国の柳橋あたりが面白からうと云ふので、新

橋三十間堀の狐鰻と称した料理屋を根拠地として附近を遊び廻つたが、此の狐鰻はまた伊藤博文、井上馨、黒田清隆三人の遊び場だつた。従つて、彼等と城氏の間には衝突の起つた事もある。

大臣参議と座敷を争ふ

それは、座敷の争ひだ。元来、此の家の奥に上段の間と称する立派の座敷があつたが、此の座敷を渡せ、渡さないと云ふ争ひのことだ。当時の城氏は、黒田、伊藤何かあらんとて、彼の人達を眼下に見下ろして居た。彼れ伊藤等は何んだ。地方官を集めて福沢先生の「西洋事情」に斯く云ふてある故、斯く為せ、箇様に書いてあるから箇様にせよ^き杯と命令し、丸で「西洋事情」を金科玉条として崇拜して居るやうの無学の奴等、城氏から見れば、「西洋事情」の如きは小学第一読本の如きものだ。^乍作^は憚^り。我輩は進化哲学を基礎として、政治経済の学を深く極めて居る。文明の知識に於て、彼れ伊藤・黒田等に優ること数等、今の大臣参議輩は我が眼中に置くに足らん、皆な劣等の奴等計りだと云ふ調子で大気焰を吐き、一步も彼等に譲らなかつた。当時城氏は十九か二十位的好青年、女将は三十七歳位で中々の美人であつたが、実は広の海と云ふ角力取を内証男に持つてゐた。其秘密弱点をよく知つて居られたから、城氏に頭が上らん。夫れゆえ女将は城氏に意地張られると、大臣参議連に済まぬ様のこともあり、折々閉口したことがあつた。そこで容易ならぬ問題が起つて来た。城氏が福沢塾の教師とは云ふものの、年齢から云へば眇たる一書生だ。其書生がどうして斯る豪遊が出来た。

昭和の今日から見れば、豪遊でも何んでもない。本の見戯にひとしき遊びであるが、明治の初年では先ず豪遊の部に属して居た。そこで其遊ぶ金の出処如何の問題であるが、之を一応説明して置く必要がある。城氏は、教師として月給を得たのと、も一つは三菱会社から折々収入があつた。其三菱のことは後で詳述することとする。

2 (136)

慶応義塾の月給制度

先づ月給の話だ。当時の義塾は面白い組織で、教授する原書の難易と受持時間の多少に因つて、月給の多少があつたのだ。そこで城氏は難解の原書をば時間多く受持つた故に月給が多かつたのみならず、当時の義塾は名実共に長岡人の慶応義塾と称して宜敷く、義塾の全権は長岡人が占領してゐた。即ち塾長は藤野善藏氏、次で芦野卷蔵氏(孰れも長岡)、会計監督は渡辺久馬八氏(長岡)、庶務監督は名児耶六都氏(長岡)、教師として城氏が大に我俣してゐたから、全く長岡人の慶応義塾であつた。長岡人が自由自在に義塾を運転してゐた。それは忖置き、福沢先生と井上馨氏は懇意で、また井上氏は疳癪持だ。例の座敷争ひや罵倒の一件から彼は疳癪を起し、先生を訪問して、あなたの処に城泉太郎、岩田蕃など云ふ教師がゐますか、彼等とは新橋辺で盛んに芸者遊びをしてゐます。全体あなたの塾は学問の深遠と品行の方正と云ふことで世間から尊信されてゐるのである。然るに教師共の不品行云々と事実を列挙して密告的忠言に及んだ。前に御話した敬遠策云々は、此密告が一原因であつた。当

時本郷の大学初め世間の洋学者は頗る浅薄の研究者のみであつた。その間に立ち、独り福沢塾の文明知識は天下無比であつたと確信する。殊に進化哲学及政治経済の二字に於ては、他に比肩するものがなかつた。また後藤牧太君の如き、数学科学に長じた人もあつた(この後藤君は、本年七十六歳で豐饒としてゐるさうで、明治初年には城氏懇意にしてゐたれど、三田を出てからは余り交はりもせなかつたが、先年独逸「アインスタイン」が来て相対性原理を述べた時、其原理が能く解らぬから之は後藤君に糾すに限ると、同君に数回質問したことがある)。夫は忖置き、城氏の芸者買話が本旨であるに話が横へ飛んだが、其序に今すこし脱線した話をして見る。

内閣組織の役割

明治初年の福沢先生を我々は神として信仰した。先生程偉い人は日本に無いと思ふてゐた。故に先生が天下を取らんと欲したなら何時でも取れるものと確信し、而も其時期は漸く接近しつつある様に思はれた。これを以て我々は、寄宿室内でひそかに内閣組織の準備に着手した(五六十年来た今日より當時を回顧すれば、滑稽とも空想とも抱腹絶倒とも何とも名状しがたき馬鹿げた次第ではあるが、併しその当時は本気で熱心であつた)。三田山上の人士だけで組織する積りで、先づ太政大臣は誰、左右大臣は誰々、参議は何其等と空中楼阁を画いた。福沢先生には極秘であつたが、遂に漏れて先生から叱られた。先生が云ふに、薩長の奴等は生命を的に賭け、槍先で天下を取つたのだ。

夫れを貴公たちが一片の言論で取らうなどとしたとて駄目の話だ、そんな馬鹿な計画はよせく、といふやうな滑稽の事実も色々あるが、兎に角、我々は福沢先生を神として信じ、東坡が韓文公廟の碑に云ふ如く、匹夫にして百世の師と為り、一言にして天下の法と為るものは実に三田の大平民福沢先生其人であるから、天下は先生の自由になるものと信じて居た。

3 (137)

かたわ娘の諷刺

政府に向つて板垣等の建白を採用して民選議院を開けと言へば、政府は直之を開くものと思ふてゐた。此一言而為天下法と云ふことに付き、脱線中、更に脱線することを許されたい。福沢先生が明治五年頃「かたわむすめ」(不具娘)と題したる本を著した。半紙十枚程の木版刷で、其内容は今日の新聞紙の半ページにも足らぬ位のもので、全く先生の「一言」である。併し其一言の影響は絶大であつて、日本全国数百年來の風俗が一変した。即ち娘が妻となれば、齒を黒く染、眉をそり落すと云ふ古來の習慣が全廃された。之は、先生一言の力だ。「かたわむすめ」に曰く、或る処に一人の女子が生れたが、此児は生れながら齒が真黒で、且つ眉がなかつた。此女子が成長するに従つて、不具片輪よと云ふ評判が追々ひろまり、両親の心配は一方ならざりしも、十七八歳の嫁入りどきとなるや、逃へ向き註文通りの妻君の姿であるから、両親も漸く安心したと云ふやうの諷刺的小品であつたと記憶する。この小品文が出版されるまで、眉を生し齒を咬くしてゐる妻君女房は天下に一人もなかつ

たが、「かたわむすめ」が出版せらるゝや、先づ三田山上福沢邸内の妻君達がこの旧慣を破壊し、次で三田通り町家の女房連に普及し、更に宮内省あたりの有難き御公家様方の奥様たちまでがこの古格旧習を脱せらるゝやうになったといふことを仄聞した。

○

サー斯くの如く先生の一言天下の法となつて、先生の云ふ通り望む通りに日本が変化する。況んや、代議政体は先生が最も熱心に主張する処だ(明治六年、板垣、後藤等民選議院の建白は、其実、福沢辺から出たものだといふても宜しからう。当時泰西文明の事情に盲目の板垣や後藤は議院政治のことなどが少しも分る害がない。之は、小室信夫、古沢滋などが福沢先生から代議政治の講釈を聴き、夫を土台にして建白書を作つたものと思ふ)。故に我々は、明治七年乃至八年には代議政体が必ず設立せらるゝものと信じ、従つて内閣組織の準備など云ふ馬鹿げた滑稽劇を私に演じてゐた次第である。又横道の面白い話がある。明治五年から福沢先生の主唱で、塾に関係ある先輩が相よつて、塾の一室で重に塾の三階で月に一回宛の坐談会を開いてゐた。処で西郷、板垣等が征韓論に敗れて辞職した當時のことであつたが、この坐談会の席上で、小幡篤次郎氏が福沢先生に向つて云ふに、副島は非常の雄弁家で、政府部内、太政官中に弁論彼に敵する者が無い、然るに其副島が民選議院へ出掛けて来て、征韓論を主張したらどうします、嫌でも朝鮮征伐をせなくちゃならん、夫では困るじゃありませんか、と云ふたら、先

生笑ひながら、「成程副島は弁論家ではあるが、併し毫も恐るゝに足らん。乃公が議院でどしどし弁論し、副島をと、つちめ（とつちめは抑へ付けるの意）て見せる。征韓なんかさせんから安心せよ」といはれた。

4 [138]

日本唯一の日新真事誌

今日から見て、面白いとか滑稽といふはこのことで、第一福沢先生の坐談が滑稽だ。人民が先生を選挙するか否かも分らんに、ちゃんと議会に出てゐる積りだ。誠に滑稽的だといふものゝ、一方からこれを見れば尤もの処もある。その仔細を述べんか、当時新聞と称すべきは英人フラックの日新真事誌だけで、日本全国に新聞は皆無といつても宜しい時代であつた。但し、岸田吟香の東京日々新聞は明治五年の春に創刊せられ、栗本鋤雲の報知新聞、成島柳北の公文通誌（後の朝野新聞）は六年七年の間に創始せられたが、併し新聞と称してよいものは日新真事誌だけで、他はことごとく半紙一枚位の新聞で、その体裁は今日町村役場から出す大掃除の布告のやうのものであつて、政治論などは皆無だつた。この間にあつて、独ぶらつく新聞は新聞紙の形体も大きく、かつ政治の談論が毎日出てゐた。彼の変名馬城泰次郎の大井憲太郎、立花光臣の古沢滋等の過激突飛の自由民権論が間断なく掲げられたは、即ちこのぶらつく新聞だ。そうして自由民権の議論は輿論の八九分を占め、加藤弘などの国会尚早論は僅に一二分であつた。この故に我々は、明治七年中に必ず国会が開けるものと信じ、而も開けたならば、副島

や福沢先生が議院へ出るものと思ふてゐた。されば前述征韓論に係る小幡の心配や福沢先生の応答も一笑の価値なきものとも申された。当時は実に総ての人々が真面目であり本気でありました。

福沢先生の大勢力

余計の談ながら、当年の福沢先生は、世間に対して大勢力があつた。其一証として、文部のことを一寸お話せんに、当年の文部は、田中不二麿氏が全権を有し、その下が九鬼隆一君であつた。此九鬼君は義塾同窓の書生で、また先生の家に食客としてゐたから、先生の感化は及んでゐる筈じゃ。田中氏は、尾張藩有名な勤王家（戊辰の頃）であつたが、それがどうして福沢信仰家となつたか、明治七八年の頃は、始終福沢邸へきたつた者だ。福沢先生から今田中がきて飯を始める処だから一緒にくはんなぞとをりく先生に招かれたこともある。そういふ次第で、当年の文部省教育方針は、福沢流の自由放任主義であつたやうだ。

ウキーランド博士の修身論

教育の自由主義と云ふことに付き、坐談は益々古めかしい方へ後戻りするが、元来戊辰前後の福沢塾は、ウキーランド博士の修身論を根基としてゐた。而して同書の要点は、リパチー即ち自由と、エクオリチー即ち平等と、フラテルニチー即ち友愛と、この三ツが道徳の基礎だと云ふのだ。それで塾では、先生

以下教師学生三四百人⁵の団体が一同此道德を實行し、または實行せんと心懸けて居た。これに付き一寸珍談がある。当年の塾は未だ三田へ移転せず、芝神明前^{（のぞ）}の新錢座に在ったが、或るとき門長屋の窓から自分が表の往来を覗いたれば、隣室の小幡仁三郎氏が窓から頭を出し、窓下を通る雪駄直しを呼び、あなたこの下駄の齒を入れ換えて下さいと全く對等の応接をして居られた。自分は驚いた。

5⁽¹³⁹⁾ 我々はまだその自分には刀を差し、雪駄直しの如きは之を非人乞食視し、其方、貴様、手前などの輕蔑語を以て呼んで居たるに、塾長とも云はれる小幡さんが、あなただの下さいのと對等の敬語を使はるゝを不思議に思ひ、

新錢座時代の慶応義塾は面白い組織で、塾長が二ヶ月毎に交代した。即ち其順席は、小幡篤次郎、小幡仁三郎、長島貞次郎、阿部泰造、藤野善藏、小泉信吉、此の六人が二ヶ月づゝ塾長を務めるのだ。小林雄七郎、秋山恒太郎氏（長岡人）等は、半学生、半は教師と云ふやうの資格だった。即ち当時の塾には一二三までの等級がなく、学生の等級は四等から始まり、十六七等までであった。最上級即ち四等は馬場辰猪、浜野定四郎、小林雄七郎（長岡人）其他岡三名、第五等は稲垣銀治、芦野卷藏、秋山恒太郎（以上三人長岡人）、莊田平五郎其他数名、渡辺久馬八氏（長岡人）に就き其わけを尋ねた。氏は座り直つて説き出した。

平民主義の福沢塾

君も知つてゐる通り、此塾には上下貴賤の區別はない。非人も我々も平等の人間だ。町人百姓も其通り、彼等に接するとき傲慢の態度を執るな、又福沢先生に対して馬鹿町寧に御辞儀などをせぬやう注意せよ、全体、先生は先生と呼ばれるゝことを嫌ふて居らるゝ、併し我々が神として尊信する先生を福沢さんと呼ぶも何んだか工合が悪いから、「マスター」と呼んでゐる、そう云ふ訳だから、教師の事を小幡先生などと呼んではならん、誰さんと呼ぶがよいと塾の風習、塾の不文律を説かれた。成るほど先生は書生等から腰を屈めて馬鹿町寧に挨拶されると五月蠅てたまらなかつたものと見え、其後を監事の名で、先生に逢ふて逢ふたとき町寧の挨拶すべからず、輕き黙礼に止めて置けと云ふ意味の布告が塾内に掲示されたことがあるやう記憶する。

義塾の長岡人

新錢座時代には大小種々の珍談もあるが、其れは後日に譲り、長岡人に関する御話を今少し致さん。当時入塾してゐた長岡人は、藤野善藏、芦野卷藏、小林寛六郎、同雄七郎、秋山恒太郎、名児耶六郎、外山脩造、栗山東吾、牧野鍛冶之助、稲垣銀治、三島徳藏、曾根大太郎、藩主牧野銳橋、中島武藤太、高野弥次郎、其他四五人居たやうだが、其姓名を忘れた。その当時の福沢塾は、日本全国三百諸侯の藩士中、最も有名の人才の集合場になると同時に、また中々の乱暴者もゐた。そこで先生が渡辺久

馬八氏を学生取締にした。氏は、塾中無二の胆力家で、何時も泰然自若と落着き、どんな危険が突発しても驚くと云ふ事のない人だった。小生は、慶応元年頃から明治十年頃まで十四五年、殆んど毎日氏を見ない日はなかったと云ふては少し過言であるが、兎に角その長い年月の間、氏が面色を変へたのを一度も見ることがない。三年の夏、三河国の莊田と云ふ男が塾の教場で大刀を振廻し大暴れして危険千万だった。処が渡辺氏は裸体になつて莊田の刀の下へ飛込み、忽ち莊田を取つて押へ、兵児帯で後手に縛り付けた。小生は之を目撃したのである。今一人の学生取締は紀州和歌山藩の騎兵隊長長郷清四郎氏で、これも豪胆の人で、先生はこの草郷、渡辺の兩人に深く信頼して居られた。其後五六年を経て、先生は馬場辰猪の妹を草郷に娶せ、渡辺氏にも妻帯を勧められたが、氏は之を固持し、一生独身の主義を執つて、且つ粗衣粗食し、丁度禪坊主と同じやうの生活（金鹿）していた。

6
〔140〕

福沢先生と長岡人

当年の塾は、全国各藩中一粒選りに撰び抜いた人才の集まりで、また一方よりこれを見れば、義塾の福沢の家族同様であった。先生は、自分の実子の如く塾生を可愛がつたが、長岡人は特別に寵愛された。これには色々事情もあらうが、重なる原因は官軍と戦つたからだ。先生は元来佐幕主義で、小栗上野守（おのゝ）を尊信し、小栗が仏帝ナポレオンに交渉し、軍艦と軍用金をフランスから借りて官軍をたゞきつぷすといふ策戦計画には福沢も

双手を挙げて賛成だ。併し独仏交渉が追々切迫し、遂にナポレオンは日本を助けることが出来ず、誠に残念至極であつた。長州の大村益次郎氏が維新後、人に語つていふに、小栗は実に偉（え）らしい人物だ。小栗の計画通り事がはこんだら官軍は全滅したのだと。流石の大村もふるひあがつたといふことだ。義塾に沢山の薩長人が入塾してをり、小生は彼等と同室に起臥し、小栗に対する大村の評言をしばく彼等から聴聞したことがある。福沢先生も亦小栗同様の意見書を御三家中で最も有力なる紀州和歌山藩の全権執政官某氏に呈した。その証拠は今に残存してゐるやうだが、茲に明言すべき限りでない。かかる次第で、先生は当時暗殺されその危険がしばくあつた許りでなく、政府が先生を捕縛しそのこともあつた。そこで先生は、いよく米国へ遁逃しやうと決心し、その洋行費を日本橋石町の堀越へ取りに遣つた事もある。その時の使者は、小幡篤次郎、中上川彦次郎外一名、都合三人であつたが、当年千両箱は一つでも中々重（おも）び故に、三人して受取りに行つたのだ。併しその時は洋行せず済んだ。

新銭座から三田へ移転

明治四年の春、三田へ移転したが、幽谷より喬木へ遷つたやうの感じがした。三田移転後も、先生は相変はらず長岡人を愛顧したが、その中でも特別に城氏は寵愛を受けた。夫と云ふも、城氏の学問の進歩が異常に迅速で、当時塾中に殆ど比肩するものがなかつたからだ。城氏は、二三年の等級を一足飛びに飛び

越^こしたこともあった。今日の教育法では、一学年から二学年、三学年から四学年と秩序的に進まねばならぬが、往昔の慶応義塾にはそんなことはなかった。天才あり学力ある奴はドン／＼早く上へのぼることが出来た。それゆえ城氏が学生としての最後の年、即ち明治五年の秋の大試験（大試験と称すものが当時春秋二回づつあった）において、四学年、五学年、六学年とおの／＼その学年の試験を受けて、一遍に卒業してしまった。こんなことは義塾設立以来殆ど空前絶後であるから、塾内の評判は非常のもので、殊に福沢先生からは天才よ麒麟児よと多大の称讃を受た。

7 [141] 城氏の云はるゝには、「何にも天才麒麟児と云はるゝ程の資質はないのだが、元々小生には英語の素養があった。即ち藤野氏が江戸から一寸帰郷したとき、英語単語篇と他に一冊の英書を呉れた。之を慶応二年頃から漢学の傍ら研究し、且つ明治三四五の二年半ほどの間は非常に勉強した。其勉強と素養の賜のものであったのだ」と。

明六社の設立

明治六年に明六社と云ふ者が出来た。これは、福沢先生、森有礼の兩人が発起人みたやうのもので、中村敬宇、西周、神田孝平、加藤弘之、西村茂樹其他数名の先輩が参加して、月に一二回の座談会を開く学者の団体であった。城氏は、福沢、森兩氏からその座談会へ折々遊びに来るやう勧められた。どうして城氏が森を知って居たかと云ふと、是には妙の話がある。塾

長芦野卷蔵の父を壽と称し、即ち戊辰時代の村松忠治衛門だ。此の壽と森の隠居、即ち有礼氏の父は大仲善で間断なく往来した。殊に両老とも非常に将棋が好きで、各初段の力があり、好敵手であった。そうして二老ともに仕事なしの閑人だから、朝から晩まで棋戦して居た。芦野の家は福沢邸内に在り、又芦野老夫妻は城氏の叔父叔母だから、城氏は絶へず出入し、茄子カボチャ又は鮮^{しん}のベタニの御馳走に満腹すると同時に、将棋が始まつてから前二階へ上つて御らんと叔母に云はるれば、果して森の隠居さんが来て対局して居るのだ。

先生に将棋の相手

当時福沢先生も将棋に熱中し、名人小野五平などを招致して差して居られ、其感化で棋戦が好きになった。併し甚だ弱く、先生には飛車落ち、森、芦野二老には両銀ほどで差してもらったが、漸次上進し、二老に対して角落ち、先生に対して平等の位置に達した。そんな訳で、三田へ森老人を迎へる使^{つか}に折々城氏が遣られることがあり、従つて森有礼氏を識つたのである。

福沢先生役人を嫌ふ

明六社では野に遺賢があるが宜いか無いがよいとか、国会直開くべきか將た尚早とか、其他外人内地雜居の可否など色々な大議論もあつたやうだが、その御話は略し、たゞ役人になるのは非に付き一寸茲に一言すれば、先づ福沢先生は役人を大嫌ひだ。之に反し明六社の過半は役人連で、福沢に対し大反対が

起つた。尤も森氏は、予て福沢先生と肝胆相照す処があつたやうだが、其他の役人連は福沢先生に抵抗し、加藤弘之氏の如きは最も激烈に反対すること猶後年板垣伯の一代華族制に反抗するが如くでありしが、終に福沢先生にやり込められ、野に遺賢が沢山あつた方が国家の爲め宜しいと云ふことに帰着し、加藤氏も弱音を出して、自分も機を見て辞職し、福沢先生の驥尾に附いて云々と公言したことが其時の明治六雜に出て居たやう記憶する。

8
〔142〕

勝海舟と福沢先生

これは一寸横へ逸た話で、且つ福沢先生に失礼に当るかもしれないが、或るとき勝海舟が明六社へやつて来て、突然福沢先生の背後から先生の肩を敲き、おい福沢まだお前は下宿屋をしてゐるかと言ひした。先生は何んとも答へず微笑して居られたやう記憶するが、下宿屋とは慶応義塾其物のことで、是はまづ差支なしとして、お前とは失礼の言に思はれるやうだが、之れは併し旧幕時代上下貴賤の区別の八釜しかりしその情力が明治年間までまだ失せなかつたからであると思へば、敢て失礼でもあるまいか。是に類似の珍聞が勝海舟と栗本鋤雲の間にもある。旧幕人懇親会の席で栗本翁が勝に対し、勝、貴様のやうの腰拔は目通り叶はぬ、下れと大喝一声したと云ふこともあつたやうだが、老生と同様に死ぬまで陶淵明に私淑し、伯夷主義を固守した栗本安芸守鋤雲先生が啾呵を切つたも尤もだ。

豊川良平氏姓名の出典

それから塾に後年三菱家の大立物となつた豊川良平と云ふ書生がゐた。年は老生より十才位上であつた。当年の塾には三四十才位までの塾生も居り、其中には堂々たる漢学者、国学者もあり、是等の全部が義塾寄宿舎の各室に散在して寝食し、昼は英書の講釈を聴き、夜は同室生と二室内に平均四五人の割合で治国平天下の術を談論するといふ調子で、塾生の過半は、一足飛に大臣参議になる積りであつたやうだ。されば此の豊川の名が面白い。豊臣、徳川、張良、陳平の一字づつとつたのであると同時に、当年の塾生氣質を代表してゐると云ふても宜い位の名で、塾内一般に野心に満ちつゝあつた。其半面は貧乏人の結合体で、羽織袴は十中九分まで持たず、絹服の如きは殆ど一人の所有者もなく、寧ろ貧乏を自慢してゐた。畢竟貧乏士族の集団で、平民の入塾者は皆無であつた。貧乏の具体的一例を語らんか、安藤源五郎なる塾生があつた。夏が来ても襦袢一枚より外に何にも持合せがないにも係はらず、一向平気で常に大言壮語しつゝあつた。或るとき菜屋の爺さんから菜代の催促を喰ふた。すると安藤傲然として、俺は近日参議になる、そうすれば菜代の溜りを悉く支払ふからそれまで待てと大喝一番した。爺さん恐れ入つて引き下がつた。夏檻襦袢入を着て近日参議になるも面白いが、概して塾生の気風と貧乏の有様は、此安藤に彷彿たるものであつた。

9
[143]

城氏盃を手にして更に語を続け、

佐久間先生暗撃の一人

下らぬ話が冗長になるが、此の安藤と老生は半歳ほど同室し、寝物語のその折柄、彼が云ふに、佐久間象山先生を暗殺した連中の私は一人でありますと、詳しく要撃の模様を語った。小生は、駄法螺^{だばら}も大概にして置けよと一笑に附してゐたが、大正の御代となり、或る処で草郷清四郎君と福沢先生伝記編纂に係る件で一会した。其時に懐旧談が出て、草郷が云ふに、安藤源五郎が象山暗殺者の一人と云ふは全く事実だ、確の証拠があるといふ話であつた。当時義塾には「ストライキ」といふ事があり、安藤、牛場卓蔵などは同級生なるが故に、他の仲間を煽動してストライキを起し、塾監局へ苦情を持ち込んで、我々教職員を困らせたことも度々であつた。小生十数年前、関西漫遊の折り、須磨の別荘に牛場君を訪問したことがある。牛場君は其とき山陽鉄道を退き、悠々自適してゐたが、大に老生を歓待し、時に貴方は何歳ですかと云ふから、小生は丁度と答へた。それなら七十歳ですか。いや飛んでもない、まだ十歳若い、六十歳だと云ふと、牛場君が云ふに、昔の先生は（自分の教授を受けた先生の意、何時迄たつても自分より年長者であるやうに思はれ、自分が今年六十八になるから、夫れで丁度とは七十歳と思つたとて互に大笑した。その時にも例の安藤の話が出て、当年義塾生の貧乏談に移り、牛場、安藤兩人の間に粗末な木綿羽織が一

枚あつた丈けであるから、何か威儀を正して外出せねばならぬと云ふやうな場合には、牛場、安藤の間に一枚羽織の引張り合をやつて大騒ぎしたこともあつたと云ふやうの奇譚を聴かされた。其時、小生京都に暫く遊び、其序に安藤の隠居場を訪れた。先生検事を止め（安藤は戊辰前から長州の有力者と交際し、殊に山田顕義氏とは別懇の間柄であつたから、山田氏の司法時代に検事になったのであらん、自適の生活をして居りしも、然し此男が佐久間象山先生を暗殺したり、大和天誅組の吉村寅太郎氏や梅田雲浜氏などに交はりを結んだ維新の志士とはどうしてと思はれない程の好々爺になり、今日の（昭和四年）老生同様に毫碌して居ました。

楠公権助論

兎に角当年の義塾は、維新の志士とか何んとか云ふ連中が攘夷主義を見合せ、泰西文明の事情を研究して見やうとて入塾し、而も斯る塾生が随分沢山居た。中には福沢先生其人を暗殺することを唯一の目的として入塾寄宿して居た者もある。彼の楠公権助論は、頗るブラック新聞の投書欄を賑し、毎日のブラックに権助論が掲げられ、先づ賛成七八分、反対二三分の割合であつたが、終に福沢先生が五苦棧千万と云ふ匿名でブラックに投書した其論が新聞に出て、権助論の全勝に帰した。

10
[144]

福沢先生暗殺の密議

併し世間がそれでは仲々納まらぬ。或る時、外神田の旗亭

で三田関係の一人が独酌して居たるに、其隣室へ来た二三の客が何か福沢々と密語し居る。其人が不思議に思つて能く聴けば、全く福沢暗殺の方法を密議して居るのであった。斯る珍事も明治初年には折々あつたやうだが、其頃福沢先生は乗馬と云ふことを始めた。監事の草郷が騎兵隊長であつたから、誂ひ向きの師匠だ。草郷に就て馬の稽古し、外出のときは草郷が供し、先生必ず乗馬で出た。一つは養生の爲めもあるうが、重に暗殺を避ける用心だつたらう。扱所謂編年的に申せば、明治八年頃から福沢先生の態度が少々保守的になりそうだったと同時に、我々は飽迄も急進突飛主義を持續し、政治は勿論のこと、風俗習慣ことごとく破壊せよ。大革命をなそうと云ふ場合に、善だから残す悪だから捨てるなんと云ふそんな氣長の事がして居られるものか。取長捨短とは閑の時の話だ。

○

今の急務は日本在来の事物を悉皆破壊するに在りと云ふ調子だつたから、先生の窃に困却したのも尤もだ。其時分には、今日の党の字はなく、会の字も使はず、社会民主組とか革命社中と云ふ風の名で、教職員及び上等の塾生中に私に結託し居る者があつたやうだ。茲に一寸申上げておかなければならぬことがある。誤解されては大変だ。帝室に関する老生の意見如何と問はるれば、老生は、「普天之下莫非王土、率土之濱莫非王臣」と簡単に答へるものである。全体帝室とは天皇とか云ふ言辞をば濫に口外するに恐れ多い事で、老生が少年時代に基督教の宣教師から聴かされたことがある。即ち猥に神の名を呼ぶは「イン

ファミー」とて甚だ恐れ多い所業であるから大に慎むべしと云はれ、此言深く心魂に銘すると同時に、日本天皇は即ち神であるから、帝室の御名を容易に口外せぬのである。

○

唯夫れだけでは答へが物足りなくあるならば、之を機会として更に一步を進め、否数歩を進めて御答へする。抑も小生は幼児専ら祖母に育てられ、其時のお伽噺に、禁裏様が御通行になると、御道筋の四辺にある神仏の像や殿堂がことごとく倒れ、山の上にある神社仏閣は麓まで転がり落ちてくる、之はつまり八百万の神仏は禁裏様の臣下御家来であるから、主君の御通行になるに自分たちが堂の内や何んかに凝然として居ては恐れ多いと云ふので、山から転がり落ちたり何かなされるので、夫れほど禁裏様は尊く恐れ多く、つまり神様の上の神様であると云ふお伽噺だ。三ツ子の魂性百歳までもで、老生今まで其の時のお伽噺の感念が腹の内の何処にか残つて居る。

11
[145]

渡辺転更先生

次で自分が幼年時代に長岡に学んだ渡辺転更先生と云ふがあつた。渡辺家は、御弓町の両丁にあり、其附近に長沢金太郎と云ふ勤王家があつた。其長男は矢一郎と称し、長岡六十九国立銀行の古い行員であつたやうだ。又舍弟に茂一郎と云ふ人もあつた。今の翠村翁其人だ。夫は別として、長沢先生が勤王学者だから、転更先生は、我々家塾生の爲め、歴代天皇御名の暗記物を長沢先生に作つてもらつた。七言古といふやうな口調で、

如何にも面白く我々は知らず識らず暗記が出来た。即ち起句は、神武起創天下、綏靖、安寧と云ふ調子で、最後の結句は今上天皇承天祿と云ふ風に、面白く暗誦の出来るやう綴つてあつた。

結句に天が二つ重なるが、或は皇帝であつたか今明言はできないが、今上は勿論孝明帝である。夫れから戊辰戦が終ると、老生は間もなく入軽井の遠藤軍平先生の塾へ入門し、直に塾長に採用された。先生は熱心なる勤王家で、小生の居るとき柏崎県の名で恩賜があつた。則ち其方勤王の志篤く一奇特云々―目錄の通りとの文言のやうだつた。先生は大の山陽流で、且つ藤田東湖を崇拜し、書は東湖を真似て居た。

小林病翁關字の訓戒

明治三年の春退塾し、藤野善藏氏に伴はれ、東京へ出るとき、表町岸屋の奥で小林病翁先生に暇乞ひせるに、先生懇篤に種々訓戒を与へられたる其中でも、關字と云ふことに重きを置かれたから、先生は此の關字を先生の遺言として七十余才の今日まで守つて居ます。幸ひに先生關字の証拠がある。其後二十年を経た明治二十余年に濟世危言と称する一書を著述し、其自序に關字のことが書いてある。加之ならず自序中には今日世間に流行して居る問題に對し、四十余年前、既に老生の意見を仄めかしてあるやふに思はれます(序文略す)。

12 [146] 城氏の談は滾々として尽きず、夫から夫へと及ぶ。

長岡藩と勤王論

亦以て帝室に係る老生の真意のある処を御察しあれ。この關字闕画といふことには、病翁先生大に心を用ひられたやうだが、彼の勤王家長沢先生の歴代天皇の御名暗記文は、七言古詩の口調であるから、誠に唱歌しやすく、独我々十余名の渡辺塾生が愉快に面白く暗誦した許りでなく、自然長岡人の間にも拡まつたことと想像する。また秋山多門といふ大漢学者があつて、此人は老生等と全く時代の違ふ故人で、即ち秋山恒太郎氏の父が左内、その左内の父か或は祖父多門と記憶する。此多門先生は、長岡の学風を全く一変した大先生で、殊に大義名分を八釜しく正した尊王敬神の人であつたやうに、老生は安田正秀君から度々聴かされた。安田君が河井總督に反抗したも、間接に多門先生の感化があつたゆへと思はれる。安田、秋山及拙家は皆血統の親戚だ。要するに、長岡人は勤王々々と妄に口にこそ出さね、戊辰の約百年前より既に禁裏様はありがたい、天子様は恐れ多いあらたかものという精神觀念は一層深く長岡人士の腹の底に植へつけられてあつたのです。

○

その長岡人が何故戊辰に官軍と戦ふたか。なにあのときの官軍は賊軍だ、長岡、会津の東北軍こそ本当の官軍だ、唯勝敗は時の運、敗けたとて恥にはならぬと老生は七十余歳の今日迄、依然さう答へてゐるのである。摂政関白二条老公は、孝明天皇に厚き御信用あらせられ、崩御の際まで、多年間、天皇の御側

を離れなかった人で、又百幾十通といふほど沢山の御宸翰を拜受し、実に賢良方正、誠忠無比の宰相でありしが、天皇は終始一貫公武合体の御聖旨で、討幕などいふ御宸慮は毫もあらせられなかつたといふことは二条老公の手書に明らかなだといふと真に恐れ多くもあり、又老生坐談の本旨でもありませんから止めますが、兎に角、老生の素養如何は前陳の次第であります。されば明治七八年ころ我々義塾にあつて破壊革命論を唱へたればとて、事と帝室には一言も論及しませんでした。有体ありていに申せば、当時の仲間の内に突飛の過激論者もあつた。併し忠君愛国の精神には毫も変りがなかつたから、此点は安心してほしい。

農業立国論

それはそれとして、小生秘蔵の大目的はヒシクラウト、即ち重農主義、即ち農業立国論だ。一寸余計の話であるが、先年の独逸戦争、世界大戦などは畢竟商業主義から起つたので、この主義を止めない間は戦争は止まぬ。故に昭和の今日、英米などが軍備縮小なんかと騒ぎ立てるは滑稽の至り、余りに馬鹿げきつてお話にもならん。併し小生の農業尊重主義は一部三百ペーじの書物にもなるほどですから、此处で坐談はしつくせません。要するに拙著済世危言の本文中に、米国の共和政体も歐洲諸国の君主政治も既に己に陳腐に属すと公言しておきました。

13 [147] しかし独り日本のみ農業主義を執つたればとて、欧米が商業主義であれば日本は亡されてしまふ、世界各国悉く農業立国でなければならんといふのです。それで明治七八年の頃、

老生は仲間の教職員から「コスモポリタン」又は「ミラボー」といふ綽名あだなを付けられた。コスモポリタンは、御承知の通り世界人、或は一視同仁の義であるが、小生は「ミラボー」と呼ばれるを殊に喜んでゐた。彼れミラボーは、今日の所謂不良少年みたやうであつたり、芸者買ひが好きであつたり、重農主義を主張したり、色々の点に於て老生類似の処があつたが、惜むらくは早や死にした。彼がもう二三年生きてゐたら、仏国帝室万歳で、革命は革命としても、歐洲各国の政体及社会組織は一新したであらうと思はれる。

特別収入の道

我々は当年、新橋三十間堀の狐鰻に陣取つて黒田や伊藤の向ふを張り、「私の友達ぢや世界に二人、アレキサンダにナポレオン」なんかと自分手作りの角力甚句を芸者に歌はせ有頂天でありましたが、其遊蕩費は何処から出たかというお訊に既に半分は御答へしたが、茲に残半を述べませう。彼の安藤、牛場などいふ塾生の一つ上の級に豊川良平君が居た。この豊川君が老生を非常に信仰してゐると同時に、当年の三菱会社は無学文盲連の集合体で、学者と称すべき人はなかつた。西洋人から手紙が来る。之を反訳するやうな人は会社内に一人もない。豊川君は岩崎氏の親戚で、弥太郎兄弟とは最も懇意であつたが、しかし一面に於ては義塾の塾生で寄宿舎にゐた。そこで会社の反訳文書が豊川君の手を経て老生に交渉があり、普通の反訳料は安価のものであつたが、豊川君の手から白紙に包んで貰ふ謝礼は莫

大であった。それともう一つは教師を教へに出るといふことがあった。当時英学が漸く流行し、東京の諸方面に英学校が出来たが、併し是等諸学校の教師の学力は甚だ浅薄なればとて、諸方の英学校から教師の教師を義塾に頼みに来て、老生なども所謂教師の教師に出掛けた事もあったが、其月給は義塾で執るよりも割合が善かった。是等も運動費(遊びの)の一助であった。又老生は三菱へ入社せよと豊川君から大に勧められたは明治七年の事と記憶する。当時岩崎弥太郎氏も漸く学者の必要を感じ、豊川君から懇々勧誘したけれども、実業(今日の辞で)など云ふことは毫厘も老生の念頭になく、断じて謝絶した。これと前後して、莊田平五郎氏が三菱へはいったが、小生等は唯々不可思議千万に思つてゐた。出処進退は吾人最も謹まねばならん、三菱の金儲け事業などは全く我々と方角違ひの仕事だ。莊田君は進退を誤つたなどと私に評したやうの次第である。

14
(148)

卒業生の捌け口

併し福沢先生は、当時義塾の有様に漸く困却されつゝあつた。と申は、追々卒業生が出来る。其卒業生の遣り場がない。皆孰れも愛国慷慨の志士を以て自ら任じ、石に噛り付いても此の目的は達して御覧に入れます、なんかと大言壮語する所謂貧乏主義の崇拜者が福沢の卒業生であるから、先生も是等学生の捌け口を見出すにホト／＼困られたやうである。それからあぬか知らねども、先生は帳合法といふ本を出版された。銭勘定の損得も少しは心得て置け、石にかじり付いたり水を呑んだり、只それ

丈で人間は生きて居れぬ、どうして飯を食ふかと思案することもある亦甚だ大切だ、高尚の書を研究し、破壊改造論を唱へるもよいが、先づ手近の腹を脹らす方便も講究せよ、貧乏自慢ばかりして居ては世間が相手にせぬぞといふのであつて、彼のかたわ娘時代には古格旧習をば片端からどし／＼ぶち毀せといふ勢ひであつたが、七八年の交から先生聊か保守的に傾き、先生家の奥座敷で娘さんが稽古する琴三味線の音も幽に洩れるやうになり、其他何にかと日本在来の風習を尊重せられ始めたが、我々は飽迄も急進の一本槍で、先生の意に添はぬ事も往々あり、それや此れやでお前は矢野に代はつて阿波の徳島へ往つて呉れと云ふ敬遠主義から地方行きを為すこととなつた。

徳島時代

徳島に着したのは明治九年三月であつた。慶応義塾分校は東御殿と称し、蜂須賀侯の御殿の一つで、徳島の東方に在るから東の字を冠し、仲々立派な建築物であつたが、其の中に我々は居住し、矢野文雄氏と事務の引続きや何やかで暫く一つ屋敷で同氏と寝食を共にして暮らしたが、或る日の雑談に氏が云ふに、我々はまだ年が若いから時々浩然の氣を養はねばならん。併し徳島は土地が狭ひから此地で遊ぶのは不得策だ。我輩は大阪で遊ぶことにして居る。土曜の晩に徳島を発し、日曜一日大阪で遊び、其夜の十二時に大阪を発すれば、月曜の朝早く此塾に帰ることが出来る。誰にも知れず極工合がいゝ。君もさうし玉へ。

大阪で浩然の氣を養ふ

我輩之を聴き、それは如何にも妙案だ、我輩もさうやらうと、折々大阪まで浩然の氣を養ひに出たが、それは別として、茲に矢野氏に係る珍聞がある。些と人の秘密を発くやうで相済まぬが、若し矢野氏から苦情が来たら、我輩其衝に當つて何時でも弁解する。珍事と云ふは、氏の愛妓にお勝と云ふがあり、氏の跡を追ふて東京に来たが、不幸病に罹り、病院に入院した。

15
[149]

矢野氏にお勝の靈

矢野氏は帰京するや、報知新聞を主宰し、次で大蔵少書記官に任ぜられ、間もなく権大書記官を経て、太政官大書記官兼統計院總監に昇進した。僅々数年間にどん／＼官等を飛越し、最大急行で昇級したといふ類例は官海に稀有ださうだが、兎に角、矢野氏は毎日お勝を病院に見舞、手厚く看護したさうだけれども、命数茲に尽き、今や臨終といふ其際に、お勝幽に眼を見開き、矢野さん貴方のお世話になりました、死んでも御恩は忘れません、必ず貴方を立身させますの一言が此世の名残り、終に息が切れた。そこで同人間窃に評判する者があつた。矢野の身体にはお勝の靈魂がつきまとうてゐる、それであんなに早く一足飛に昇進したといふのであつたが、大評判の当否は別として、矢野文雄氏の人物は実に大人物で、深沈にして大略ある漢の高祖の大偉人だ。

○

城氏の氣烟は益々揚がる。……近年大阪毎日新聞社の副社長を罷めてから世間には余り名が聞えぬ。名が聞えぬからとて天賦の品性に變りはない。寧ろ知名の輩よりも無名の人士中に人物がある。彼の知名の人士とて世間から持囃され、雷名が天下に轟くといふやうの奴は碌な人間でなく、毎日の新聞に名が出て、所謂名声噴々たる人物は即ち紙屑的人物で一顧の価値でもない。彼の原敬で判る。彼は、矢野君に採用され、報知社で矢野君に鼻の先で願使せられてゐたが、それが終ひに總理大臣になつた。矢野君は、表面に立つて格別の仕事もせないやうである。それであるから原の方が偉いのかといふに、決してさうではない。外務や政府にゐて鰻上りに大臣宰相の地位に達したればとて、当人の真価が向上発展するものではない。唯外交のペテン術や辭令や掛引が上手になる丈だ。さて一旦大臣になると、馬子にも衣裳で、名利の奴隷といふ幫間末社に担がれて、それで其地位が保てるのだ。併し原敬氏の如きは、歴代の總理大臣中では上等の人物であるかも知れないが、矢野氏は、其原敬氏の上に立つべき大偉人と余輩は品評するのである。要するに、慶應義塾古今の出身者中、矢野文雄、大養毅の二氏は無比の人物である。

森田思軒氏

森田文蔵君は、森田思軒と号し、文人社会に名があつたが、同人は、阿波慶應義塾分校の最下級の少年生徒であつた。それを矢野氏は何処か同人に見込があつたと見え、大に同人を寵愛

し、徳島を去るに臨み同人を供につれて帰京したが、果して矢野氏の眼力通り東京で文名をあげた。小生が養成した書生中にも色々面白い奴があつて、後年国事犯で禁獄になったものなどもありしやに聞いてゐる。

16 [150] 京都本願寺からも数名の坊主が入塾し、中にも岡村石亀など云ふ小僧侶は鉄中の錚々で、後に東京一大寺院の住職と為り、曾て小生が中村敬宇先生の葬儀に会葬したる折、石亀の寺田福寿も来つて神妙に控へて居た。其他管了法、蒼学応、又は土岐法竜などの坊主塾生を教授したが、それは徳島であつたか東京三田であつたか、今記憶を逸したが、此の土岐君は真言宗で、最初は仁和寺の管長、後高野山金剛峰寺の管長に転じたやうだ。阿波時代を一言に結べば、小生は依然たる急進突飛主義で、否東京時代よりは益々過激に之を鼓吹し、徳島寺町の寺院や劇場で殆んど毎日のやうに演説したが、其時分は集会条例など云ふものは皆無であつたから、どんな激烈の論旨でも自由自在に述べる事が出来た。

土佐時代

阿波自助社から土佐立志社へ門野幾之進と行き、先づ板垣退助氏に逢ふた。其時、小生が一番に感じたのは、薩軍の進退掛引に関する板垣氏の評言であつた。板垣氏が云ふには、残念ながら此度の戦争は西郷が負る。何故ならば、西郷は日割をして鹿児島を進発した。そんな手ぬるいことでは文明の軍はだめだ。敏捷活潑を主眼とせねばならん。西郷は、桐野、篠原等に万事

を任せ、自分は軍務に超然としてゐるやうだから、日割のことも西郷自身は知るまいけれど、兎に角、薩軍は余り驕り過ぎて居る。幕府時代、大名は日割をして江戸往來したものだが、薩軍も丁度そんな心持で進発した。それでは軍に負る。自分(板垣)が西郷であつたら、熊本鎮台などに取合す、早く九州一円を手に入れて中国へ突進する云々。なるほど板垣氏の言ふやうにしたら、天下は西郷隆盛のものであつたかも知れん。序に一寸小林雄七郎君に付き一言する。此の西南戦争の折、小林氏の挙動は甚だ面白くなかつた。元来氏は、明治五年から官海に遊泳し、藩閥の空氣を呼吸して、三田の福沢連とは絶交も同様であつたが、殊に十年の役に氏が政府の内命を受けて長岡人の徵募調査の募集に出掛けた。氏に言はすれば、薩摩は戊辰のときの敵で、西郷は仇だ、其仇敵を打つ今は好機會であるではないか、殊に長岡人は順逆を誤り王師に抗したといふ汚名を帯びて、其汚名を雪ぐは今だ、今を逸しては好機復來らずと云ふ調子で長岡人を煽動し、長岡から大分人数が繰出し、中に戦死戦傷した人々も多少あつた。我々福沢連は、当時小林氏の此挙動を大に非難し、あの藩閥の走狗めがなど、冷笑して居つた程であつた。

17 [151]

三田の福沢邸

序の又序でありますが、薩摩談で福沢先生に付き一寸思ひ出したことがある。当時薩摩藩邸は三田に在り、所謂薩摩の七曲で、広大無辺と称してはちと誇張に失するが、実に茫莫たる数

万坪の大屋敷で、俗に云ふ薩摩原、それが明治十年に育種場とか何んとか名が付いて、農事試験場らしいものが出来、其開場式に天皇陛下の行幸があった。福沢家は三田の山上にあり、山下薩摩屋敷の隅々まで双陣に入るのだ。また御通行の際は家の内で拜観してならぬと云ふ布告が出た訳でもないから、三田町家の裏二階などから窺に拝見したものもあつたかも知るべからず。併し我福沢先生に限りソナナことはない。家の内で陛下の御通行を拜しては甚だ恐れ多いと云ふので、階上階下の雨戸をことごとく密閉すべしと家人に厳命された。亦以て先生尊皇心の如何を察するに足るべしだ。近來世間には濫に勤王を振り廻し、勤王の専売特許、一手販売權でも得たやうに振舞ふ輩がある。こんな奴等には先生の爪の垢でも飲ませてやりたい位だ。疾く既に申上げやうと思ひながら、今迄忘れて居たことがある。それは、小幡の名に係る一鎖事だ。戊辰後までは、老生の御話した通り小幡仁三郎であつた。併し、仁の字は官内省方面に対して恐れ多いといふので、福沢先生が仁を甚に改めさし、氏の洋行前には既に甚三郎に書き改めてをりました。

最も愉快な得意時代

扱愈々土佐談であります、当年の土佐は実に面白くありまして、老生の一生涯中、最も愉快で最も得意の時代でありました。西郷は負けたが、土佐は負けん、必ず政府を顛覆して見せるといふ勢ひで、人氣の昂奮は実に非常のものであつた。此時ほど(明治十年来より十一年夏まで)土佐人心の動揺し振興

し有頂天になつたことは、土佐に空前でまた絶後であつたらう。明治五年頃から革命論を主張し、藩閥打破を最大の目的とせる自分の爲めには、復と得がたい好機会だから、自分は身命を賭して活動した。板垣とは殆ど毎日往来した。板垣は四十才、自分は二十三才、年からいへば板垣は遙かに自分より上だが、欧米文明の知識は自分の足元にも及ばない。それで自分は顧問とか参謀とかいふ調子で板垣から大に信用せられ、当時高知に居た人士中、自分ほど板垣に重んぜられた者は他になかつたやうだ。何にも板垣に珍重されたからとて悦ぶのでもなく、自慢するのでもない。只事実の御話である。栗原亮一、竹内正志などは、東京の慶応で自分等の講釈を聞いた塾生であつたが、自分が土佐へ参つた節は、彼等も来て居り、立志社から小遣ひを貰ふて書生兼壮士といふ調子であつた。

18
[152]

伊藤参議の御首頂戴

杉田定一に至りては、其位置彼等より一層低く、我々は演説会の供に伴れて出た。我々が楽屋から会場を覗けば、聴衆は満堂で、杉田早く演壇に登れと自分等が命ずる。杉田は畏まりましたと登壇し、伊藤参議の御首頂戴と只それだけの一口で下壇する。聴衆は、御首頂戴が気に入る喝采拍手したが、当年の杉田はその一口より外に何等の知識もなかつたのだ。夫が後年北海道長官や衆議院議長や何かに成つたが、人間の運命は妙なものである。また栗原亮一の如きは、今日の浪花節語りも宜敷くで、三尺高い木の空でと国定忠治もどきで怒号し、二三分で降

壇する。我々は民権自由の犠牲となつて、首を獄門台に曝すといふ意味だ。聴衆は拍手狂気する。最後に自分が座頭か真打といふ格で登壇し、一二時間演説する。これが毎日極つた順序であつたが、土佐人士は一般に自分の演説を喜び、城泉太郎は土佐演説の創始者か革新者だとありがたがられ感嘆されたが、是は自慢でも法螺でも何んでもなく、有の儘の御話をするので、土佐人位に尊信されたとして、我名譽になる訳でもないまい。明治十年前後の土佐青年でまだ存命の人があるならば、当年余輩の活躍よりは多少記憶に遺つてゐるであらう。大石正巳君等は、当時我立志学舎の書生で（一級生と記憶）、スペンサー社会学、ベンザム立法原理、ナポレオン、コード杯の講義を聴き、熱心に勉強してゐたが、時に或は我演説の前坐語りをしたこともあつた。同人はまだ存命らしいが、自分は久しく逢はん。奥宮健之と云ふ書生があり、大石の同級生であつたが、同じ級でも大石等より遥かに本を善く読んだ器用の男であつた。この奥宮にも演説の前座を語られたこともあつたが、其後同人は巡査殺しだの大逆罪だのと飛んだ悪人に為りましたやうだ。

土佐民権

演説の取締法規などは全くなかつたから、どんな過激のことでも自由自在に述べられた。加之に板垣の立志社が土佐の全權を握つてゐたから、県庁などは有れども無きが如くで、県令小池国武（後の渡辺国武と記憶す）などは、県庁の隅に縮み上つて居り、土佐全国民権自由に賛同せぬ者は人にして人に非ずと

云ふ勢であつた。

○

演説の帰りは、板垣氏と自分の兩人、大概遊山船に乗る。栗原、杉田等も御供に付いて来る。必ず芸者を呼び歌を歌はせるが、中にも民権歌といふ、我々手製の歌が面白かつた。一寸其二三を紹介すると、こんなものであつた。

よしや節

よしや朝ねが好きじやといふて
殺しつくせぬあけがらす

朝寝をしてゐる者は藩閥政府、我々は烏で、禁獄罰金、屁のこつぱだ。お前は専制政治をやつて居たからうが、我々民権家は新聞に演説にがあゝ怒号し、お前の朝ねを醒ましてやるの意。

よしやお前が胡麻かす氣でも

結髪なるまい乱れ髪

綱紀紊亂を糺すの意。

よしやお前が仏蘭西氣でも

私や亜細亜のがんべつた

お前は藩閥政府で我々民権自由主義の志士を振つてゝ振りぬいても、我々は飽までも東洋のがんべつたを以て自ら任じ、お前を倒してやるの意。併し是れは駄作のやうだ。

19
(153) 巧妙なる煽動者

また海晏寺の作り替へといふ歌曲もできた。それは左の如く

である。

あれ見やしやんせアメリカの七年^{ななとせ}血汐を流せしも、これもたれゆへ自由ゆへ。

あれ見やしやんせるーそーの牢屋の内のうきかんく、これもたれゆへ自由ゆへ。

総てあれみやしやんせ、で始り、自由ゆへ、で終るのであるが、抑揚巧妙を極むれば、聴者をして恍惚たらしむるのがある。こんな歌を二三十程、先づ之を芸者社会に流行させたが、其影響は至大でありました。元来、高知の南北両端に南新地、北新知と称する両遊廓あり。高知の芸者は主に此両処に居住して居りしが、大阪から来て北新地に住まふ芸者に君勇とか何とかいふ老妓があつた。顔は別段ほめるほどでもないが、音声の優美なる事は高知第一と称讃されて居た。我々は、此妓を常に遊山船に招き、例のよしや節や海晏寺の作り替へを歌はせたが、彼女が美声を張揚げ、頓挫抑揚の妙を極めて歌ふときは、東坡の赤壁もよろしく、其声鳴々然として藩閥政府を怒むが如く、憂国の志士に訴ふるが如く、余韻^{いとし}濁々、絶へざる纏^{いと}の如くて、我々は恍惚として真に天国にでも居るのではないかと思はれた。白楽天が尋陽江頭で琵琶婦人のため青衫を濕^{せし}ぼしたも尤もの次第で、音楽の力は実に偉大だ。或るは人心を緩和し落着かせるも音楽であるが、或はまた民心を動揺せしめ煽動するも音楽だ。

○

孔子は、戦国時代の人心を緩和する為め音楽の必要を主張し

たが、我々は其反対に民心を動乱せしむる為め音楽を利用し、而も其効果は莫大で、寧ろ余り煽動が過ぎはせぬかと思ふ程であつた。或る日、自分が板垣氏等に言ふに、昔ローマで、「ブルタス」等が「シーザー」を刺し殺した其時に、シーザー派の「アントニー」は、「シーザー」の死骸の前にローマ市民を集め、史上に有名な大演説をやつた。ローマ市民は、最初「シーザー」の暗殺されたるを大に歓喜して万歳を叫び、此の大莊制家、大野心家を殺して呉れたものは「ブルタス」や「カシアス」だ、此数名の人士は愛国者である、救世主であるとして、市民一同涙をこぼして、「ブルタス」等をありがたがりしが、アントニー演説の半に至るや、市民はぐらつき出し、或る程さう聴いて見れば、シーザーもそれ程の悪人では無かつたのだ、殺されたは氣の毒のことにしたといふに至り、演説の最後に至らんとするや、市民の昂奮其極に達し、「シーザー」は我々の大恩人だ、国賊「ブルタス」をせせ、仇敵「カツシアス」を屠れと怒号したのである。斯く巧妙に民衆を煽動することが出来れば、演説の極致といふべしだが、われわれの演説はまだ聊かその度に達せないのである、アントニーとは場合が違ふ。彼は、血の滴^{した}るシーザーの屍を前に横^{よた}はらせつゝ、自分がローマ大帝國を創設するか、果^{はた}ブルタス等の共和政体が持続するか、退^{ひき}引ならぬ危急が眼前咫尺に迫つてゐる。

20
[154]

血に渴す

極度に激昂せる群集は、抜きたる短剣を右手に握り、アント

二一の身辺二三尺の処まで舞めき来^{きた}った。彼の一言は一擲^{てき}賭^ど乾坤^{こんけん}だ。彼の片言隻句は地獄極楽の境だ。斯る危機一髪の際にこそ一世一代の智慧も出やうが、今土佐の場合それはほど危急存亡と云ふべきでもないから、我々の演説に多少の弛^{ゆる}みのあるも已むを得ぬ。之を補ふは音曲に限る。音曲は人間の感情に訴へ同情を収攬するものなれば、南北各地の芸者に民権歌を歌はせ、次で一般土佐社会に普及さすべしとの自分の主張に板垣氏初め満座の人士拍手賛同し、則ち前述のヨシヤ節や、アレミヤシャンセの作り替を自分等が作曲し、安岡道太郎と云ふ音曲に最も巧者の土佐旧藩士が之に節付^{ふしづけ}し、盛んに芸者社会に歌はせた。其反響は実に意外と云ふも愚なるほどの次第で、婦人等まで到底血を流さずには済みますまい、早く血が見たいものです杯と申しきたるといふ有様であった。

戦闘の模擬戦

又これと同時に旗奪といふが盛んに行はれた。これは、数千百の青年壮年が桂浜、仁田浜、浦戸浜などいふ高知附近の海岸に集合し、東西又は南北の二た組に別れて、真中に一本の丸太棒を立て、其棒の頂上に旗一旗をへんぽんと懸へし置くのであるが、扱^{さく}二組に分れた勇士は、太鼓を合図に此の棒を目掛けて双方より疾駆し来り、棒上の旗を奪取せんと競争するのである。たゞ競争といへば、今日は大小学校を初め世間一般に流行するから、何でもなく極手軽な遊戯のやうに思はるゝが、土佐此時の競争はさように手輕のものではない。全く命懸だ。大阪鎮台

の石垣にでも上りつゝ接戦するときは斯くやあらんと思はるゝ計り、敵味方入り乱れて旗を取らう取らせまいの激闘は模擬を離れた実戦其物を見るやうである。されば或は手を折り足を挫き、或は流血淋漓たる怪我人など、此の旗奪のある毎に無数の負傷者が生ずるのだ。以て土佐人士が藩閥政府顛覆に熱心なる状を知るべきである。

○

斯る折りしも突然として東京より飛報あり。曰く、大江卓、林有造、陸奥宗光諸氏を始め、其他重なる同志者捕縛せられ、且つ立志社所有の大山林(今回軍用金唯一の財源)、政府に差押へられたりと。青天の霹靂^{へきれき}とは此事で、高知全市は全く火の消えた如くであつて、或は板垣氏の身辺も危しとさへ伝ふるものがあつた。

21^[155] 氏の談話は、いよく犀利な口調を以て、土佐の自由民権時代をスパクと語つてゆく。

政府にも人あり

我輩、船にて新田別荘に板垣氏を訪問せるに、何だか家の内がざわざわしてゐる。我輩、板垣氏にどうしたのかと尋ねた。氏は、いや庄制政府のことじゃから何をするか分らん。或は自分を捕縛するやも知れん。自分は其覚悟で今準備をしてゐる処じゃと微笑を浮べつゝ答へた。併し敵も然る者、否流石に政府に全く人なきではない。即ち政府の方針は、重なる枝葉を断ち、根幹は自然の枯涸^{こくわう}に委せ、板垣氏には差当り手を付ぬ趣き密か

に確報があった。全体当年の土佐人は、板垣氏を神の如く崇拜し、民権自由の大本尊として信仰し感激しつゝあつたから、若し板垣氏の身辺に危難が切迫すと土佐人が聞いたら、如何なる珍事が出来^{しゅんたい}するやも計られない。政府が陸奥、大江、林等の如き板垣氏の手足を断ち、板垣其人を其儘に放任して自然の凋落に委したる寧ろ策の得たるものといふべきか。併しそれはそれとして、陸奥等の捕縛と共に土佐の運動が停止した。盖し土佐活躍の中心は立志社で、民権自由拡張に関する大小の経費を初、今回大阪攻撃に臨時必要な数十万円の軍用金は総て立志社から支出する筈なりしに、前談大山林の差押へによつて、立志社の金融が全く閉塞されたのである。加ふるに、我々の身辺も多少の不安を感じずにはをられぬ。よつて板垣氏に前途の相談をした。前談陸奥等捕縛によつて、板垣氏の心機一転したやうだ。板垣氏が西郷氏に代り槍先で天下を握るつもりであつたかどうかは茲に明言の限りでないが、兎に角、板垣氏が自今言論を唯一の武器として藩閥政府と戦ふの決心を固めたは此時だった。よつて不取敢、大阪に愛国社を起し、演説と新聞といふ此二つの武器によつて政府攻撃をやる筈で、其社長は副島種臣氏が最も適当ならんとて、氏を招致することに協議一決はしたが、^{おの}誰が副島説得の任を引受けるか、これが却々困難の問題だったが、余は、板垣氏の懇請により遂にこれを引受けた。

談判の秘訣

其時板垣が余にいふに、副島は議論が上手で且強情で頑固だ

から、一旦頭を横に傾けたが最後、之を縦に直させるは容易でないから、貴君あらかじめ充分注意して仕掛からねばならぬ。之に付、貴君の参考までに面白い話がある。曾て自分(板垣)が東京に在つた際、英国公使パークスから聴いたことがある。それは、外交談判上におけるビスマークの秘訣といふのだ。すなはち対談の際に相手方と相對して坐するとき、自己は日光を背後に受け、先方の顔を光明が直射するやうに坐するのだ。早く云へば自分の顔は成るべく判然せぬやうに、先方の顔は成るべく分明に見えるやうに坐を取る。これがビスマーク秘密の第一条。その次は煙草を吹かすのだ。先方からたゞみかけて追究せられ、自分が答弁に詰まりかけたら、煙草を吹かし、其煙で我面を隠すやうにせよといふ。此二ヶ条がビスマーク外交談判上の秘伝ジャトパークスからきかされたと板垣氏の話であつた。

22
(156)

副島氏との会見

七月十日高知を発し、勢州四日市から汽船で東京に着し、直に副島氏を芝愛宕下町の寓居に訪ふた。其だ粗末の家で、座敷に通されたけれど、光線の工合でビスマークの秘訣を実行が出来さうもない。併し板垣氏の紹介手紙(板垣氏の口授で令嬢の認めたもの)には大いに偉らい人傑として余輩を紹介してあつたものと見え、初対面であるに係はらず、万事腹藏なく話で呉れた。彼が此愛国社々長を引受なかつたことは、座談の冒頭に話しましたが、全体副島といふ人は、平常の談話が漢文口調

で、余が前述愛国社の依頼をしたとき、氏は、昨日までの元老院幹事（陸奥）今日は縹緞（えいどく）のはづかしめを受く、吾はただ天地を眺めて大笑するあるのみと、副島氏の談話は、多くこんな調子で、漢文を読んでもあるやうだ。余は色々の話を聴いたが、まづ枝吉神陽先生の事を語って見たい。余は明治三十四年の頃から義塾の寄宿舎で佐賀人と一緒に、神陽先生の偉らいといふことをたび／＼聞かされた。佐賀人に言はすると、神陽先生は實に佐賀第一の大学者、大人物であるのみならず、九州第一の豪傑で、薩摩の西郷などよりは遙かに卓絶したる大偉人だといふのである。そこで余は爾來、この神陽の事跡を調べて見たいと思ふたことも折々あったが、その機会がなかった。然るに今回（明治十一年七月）、此神陽先生の実弟たる副島種臣氏と座談すること好機なれ、御実兄神陽先生云々と質問を始め、氏はこれに対し諄々話て呉れ、元來余は此の時が副島氏と初対面であったが、爾來、氏の晩年まで数十年間、氏と親密にして居り、長い座談をして、しばしば飯の馳走になり、又氏は支那料理がすきで、日本橋茅場町の偕樂園へ能く出掛けたもので、彼の日清戦争の時分に余が偶然氏を訪問せるに、今これから支那を喰ひにゆく処だ、一緒にゆこうと案内されたが、日清戦争中は支那を喰ふとして頻繁に偕樂園に通ふたるは氏の自白だ。斯かる次第で副島氏と座談の機会はたび／＼あったから、神陽先生の事は殆ど細大漏らさず之を知ることができた。依つてこゝに我聞きし処を綜合し、少しく脱線ではありますが、神陽先生につき概要をお話することゝする。

枝吉神陽先生

副島種臣の実兄が枝吉神陽先生、父を枝吉南豪（平左衛門種彰）といふ。神陽は其長子、次男は副島種臣で、初枝吉二郎と称せしが、出て副島家を継ぎ、枝吉二郎が副島二郎となり、戊辰の際に二郎を種臣と改めたのである。神陽の通称は駒一郎、諱は經種、文政五年に生れ、文久年間に病歿す。享年四十一歳。一寸茲に予め一言することがある。抑々副島種臣其人は極正直で法螺を吹くことなどは大嫌ひだ。また人を褒貶することも甚だ稀だ。併し非常に自信が強く、容易に人に譲らない。自分ほど偉らしい者は日本にないと云ふ調子だ。

23 [157] 城氏の談話は滾々として尽きぬが、聴けば聴くほど辛辣である。

西郷も孔子も眼中に無し

曾て余輩が西郷の人物論に及んだ処、副島氏は、何あの男が薩摩に生れたればこそ、あれだけの仕事が出来たので、若しあの男が東北地方の出身で、もあつたら格別の事もなかつたらうと、西郷の如きは全く副島の眼中にない。単に西郷ばかりではない。孔子すらも其通りだ。余輩が孔子時代に付き雑談せる折、副島氏は、魯の孔丘が魯の孔丘がといふて孔夫子とも孔子とも云はない。案ずるに、副島氏の胸中は、人格に於いても見聞に於ても孔子と自分は同格じゃ位に思ふてゐるのではあるまいか。自信もこゝに至つて極度といふべしだが、神陽先生に対し

ては、流石^{さすが}の副島氏も称揚賛美措かざるのだ。唯此一事を以て神陽先生の人の為りの一班に揣摩^{さくさ}するに足らん。脱線的の前提は是迄として、本坐談に立ち戻り、神陽先生を語らう。

神陽先生の容貌

先生容貌^{かうがう}魁梧^{かいこ}、方面大口^{おほくち}と副島氏は筆記してある。世間普通の伝記書類に伝記本人を形容して容貌魁梧とか書いてあるが、それは決して当にならん。併し虚偽大嫌ひ法螺大嫌ひの副島氏が魁梧と明言するのだから、神陽先生は事実上体格が偉大で侵すべからざる風采が備はってあつたらう。方面大口とあるから、顔は寧ろ円形に近く、口は大きく引き締て如何にも英雄的立派の口元であつたらしい。隆準にして濃眉とあるから、鼻すじが通つて且つ高く、眉は長大で且つ濃厚であつたのだ。眼偉長^{げいぢやう}炯^{けい}光人を射ると手記してあるから、眼は大きく且つ切れ目が長く、此巨眼から閃電の如き光放射されるのだ。音吐洪鐘の如く屏障も為に震はんとすとあるから、如何にも声が大きく、障子の紙もピリ／＼振うやうであつたと云ふことだ。前にも反覈^{はんかく}したやうに、副島翁は些の銜気もない人で虚飾虚栄などは大嫌ひであつた。或は偶々大言壮語する事もあるも、其言には一々根拠があつて、唯漠然たる駄法螺^{だぽろ}を吹くのではない。翁は無駄ごとなどは一言も口外せず、必要な言辞の外は使はぬ人であつた。翁はまた斯く真面目で正直であると同時に、自信力非常に強大で、自分が頭を下るものは帝室以外に天下に皆無であると思考して居た。彼も談偶然神陽先生の事に及ぶや、彼先づ形ちを正しふ

して先生を語るのであるが、其語は決して褒貶的でなく、批評的でもなく、唯々の儘の事跡を述べるに過たけれども、聴聞者に於て其事蹟を深く考察し反覆玩味すれば、いよ／＼益々神陽先生の人と為りの偉大なることを語るのである。

24 [158] 神陽先生はまた、肥前勤王論の祖始と称するも敢て過言ではあるまい。尤も先生以前にも勤王論は多少はあつたらう。併し大義名分主義を徹底的に主唱し、かつ之を實踐履行したものは先生である。されば実弟副島翁が先生の感化と教養に依り、熱心なる勤王主義を抱懐せるは勿論、江藤新平、大隈重信、大木喬任等の諸氏は何れも先生に師事し、先生の薰陶を受けて成人したのである。されば維新の際に薩長土肥と謳歌されたるその肥前勤王の由来以て察すべきである。

明治天皇の御信任

今代の佐賀人は、超人的神仙として副島蒼海翁を崇拜してゐる。然り、翁は実に神仙である。脱俗的超人である。既に超人であり神仙であるから、名譽だの利益だの云ふものゝ為め心を勞することは毫厘もない。名利の二ツは全く翁の眼中にない。これを以て常に貧乏してゐたが、俗事には一切無頓着で、貧乏を少しも苦にせなかつたやうだ。余輩が初て尋ねた愛宕下の家は、家賃五六円の借家らしかったが、明治天皇がもつと長き宸翰を賜はつたは、この借家住ま居のときではなかつたか。白楽天のいはゆる大隱在朝市で、蒼海翁の如き大隱になると、愛宕下町の如き市井が即ち山林だ。そこで天皇陛下の宸翰に蒼海翁

を賛美し玉ふ種々の勅語の中に、卿の如き人材が山林に隠棲してゐるは惜むべし、朕は卿の奨順匡救にたよらんと欲すといふやうの意味の宸翰であつたらしく、伝承したが、併し数十年前の事であるから失念もあるだらうが、山林といふ文字のあつたことだけは確のやうだ。それから間もなく翁は一等侍講になつたと記憶する。但しその六七年前の明治四五年の頃、翁は外務大臣であつたが、国際談判のため弁理大臣として支那へ出張し、帰朝後、例の征韓論に破れて野に下つた。此ときまで翁の屋敷は霞ヶ関で、今の離宮の地全部が翁の邸であつた。翁は、之を二束三文に売払ひ、之を旅費として支那漫遊に出掛た。李鴻章と肝胆相照らし、親密の交誼を結んだは此際であつたとのことだ。李鴻章は、副島翁を目して日本第一の人物となし、ふかく信用してゐたは事実だ。其のち日本の公使領事はじめ種々の日本人が李鴻章を訪問すると、彼は第一に副島の安否如何を尋ねたさうだ。以て彼が副島を慕ふの情を知るべきだが、副島も亦李鴻章を非常に信じてゐた。日清戦後、李鴻章は支那を代表して露帝の戴冠式に列し、帰途米國を経て横浜に立寄たれども上陸はしなかつた。依つて副島翁は、艦内に李鴻章を訪問したるに、彼はふかく副島翁の厚意を謝し、一別以来の談話に花が咲き、興味津々として、翁も計らず辞去することを忘るゝほどなりしと云ふ。

26
[160]

頼山陽を罵倒

何ほど口が大きくて行き詰まつたやうで遠くまで通らぬ声が

あるが、神陽先生の音声は、所謂音吐朗々で遠方まで善く響き、少し声を張り揚げれば、即ち洪鐘の如く鳴り亘り、若し国家経綸談でも始まつて何か憤慨したが最後、其巨眼は爛々として光り、其音声は霹靂の如く轟き、とても当るべからざる勢ひが現はれたさふだ。また神陽先生は体格強大にして健脚比なく、実弟の副島氏が先生を歌ふて健脚日行二十里といふて居るが、日々に二十里づゝ歩いて毫も疲労の態がなかつたとのことである。曾て高履を着け富士山を登降して疲れずと副島氏が明言して居るから、是も法螺でも嘘でもあるまい。

○

神陽先生容貌体格の話は此位にして、先生の精神的方面を略述せんか、先生は日本々位で終始した人だ。神州男児に生れたことを先生の誇りとして居るのだ。先生少時頼山陽の政記を読み、山陽を罵倒したことがある。神武天皇の論贊に、山陽が漢がどうか唐がどうか言ふてある。山陽をこゝに至つて庸々碌々たる腐儒と山陽を罵り、李淵を援いて我神武天皇を試むるに至る、不敬も亦甚だしと絶叫した。先生自作の詩文に故事を引用することあるも、決して支那の故事を用ひず、必ず日本古来のもの、即ち神代巻以下の典故を使用し、而も風韻天籟、咳唾も珠を成したりと云ふ。以て詞藻の豊富なること知るべきである。先生強記比なく、一たび見聞すれば終身忘れざりしとぞ。副島氏は、神陽先生を評し、二十一二歳然天子なりと言ふて居るから、先生は二十一二歳のとき既に立派なる和漢学の大家であつたやうだ。併し先生は学問が目的ではない。其志は天下経

綸にあつたのだ。副島氏も先生の薫陶と感化に依り、学問は片手間の仕事、即ち副産物であつたやうだが、併し其副産物たる学問も広大深遠で他に其比がないやふに思はれる。重野安繹先生は今は故人であるが、其在世中は比類稀なる大漢学者であつた。其の重野先生が副島氏を推称し、到底及ぶべからずと敬服してゐたそうで、それほど学問の該博なる副島氏も神陽先生の学力には恐れ入つてゐるのだ。先生の眼中には、朱子もなければ王陽明もなく、唯経を以て経を説かんのみに常に云ふてゐたさうだ。世間或は先生の経義深奥、史学宏渉にして詩文の華麗優秀なるを讃嘆するものあれど、これ所謂片手間の副産物のみ。先生の志は即ち日本本位で大義名分を正すにあるのだ。

27 [161] 先生少壯時代江戸に遊び、昌平黉に入り舎長となりたるが、当時の学……に迂儒の糟粕を嘗め、漢土の陋……して神州の精髓を知らざ……林道春以来の読書次第を……尊王の士気を鼓舞するに力めた。先生常に云ふ、名正しからざれば言順ならず、言順ならざれば則ち事成らず、是を以て天下を経綸せんと欲せば、須らく先づ名を正すに在りと。先生嘗て「名分称謂正考」を著はし、此志を言ふとは副島氏の談話であるが、換言すれば大義名分を正すこと、即ち日本々位、即ち尊王抑覇が先生の大眼目であつた。「……部分、原本破損のため不明」

攘夷の急を説かしむ

米使ペリ来り天下騒然たり。神陽先生、則ち実弟副島種臣を京都に派遣し、大原三位公に謁して攘夷の急務なる所以を説

かしむ。公その説を容れ答へて曰く、攘夷は固より可なるも、事頗る重大にして余の敢て当る処に非ず、足下之を青蓮院親王殿下に啓すべしと。副島則ち殿下の邸に到り、之を啓上し、執事伊丹藏人と互に問答審議せしが、偶々幕府有司の咎むるところとなり、終に鍋島藩庁は副島を捕縛禁錮し、郷里佐賀に幽閉したのである。又之と前後して神陽先生を閑叟公に讒する者あり。曰く、神陽は独朝廷のみを重んじて藩室の事は甚だ之を軽んずと。閑叟公人をして神陽を責めしむ。神陽答へて曰く、藩室の事を軽んずとは豈朝廷を尊ぶを以てか、夫れ朝廷を尊ぶは藩室の義を成す所以なり、是即ち藩室を重んずるなり、決して軽んずるに非ずと。公聞いて之を措く。神陽また藩主に対して臣と称せず。閑叟公また人をして其理由を糾弾せしむ。神陽答へて曰く、普天率土王臣に非ざる莫し、明公閣下夙に此の義を知り玉はんと。閑叟公この答へを聞き、之を懿とす。公また人をして神陽に告げしめ曰く、汝の弟種臣を幽囚禁錮せるは実は彼を保護したのである、汝も知る如く、種臣の交友なる頼三樹三郎、梅田源次郎、吉田寅次郎、橋本佐内其他数十名の有志皆已に惨刑に遭ふ、或は種臣の身に連累波及を恐る故に之を禁閉せるなり、汝善く之を視んと。神陽深く閑叟公の恩義に感激したとのことなるが、局外より之を觀れば、君臣水魚の交と評すべきである。

28 [162] 朱鞘の太刀に高足駄

神陽先生惡衣惡食を厭はず、常に朱鞘の太刀を佩び、高履を

着けて歩行する其有様は、威風堂々として侵すべからざるものがあつた。副島氏の筆記に、先生の人と為り度量以て人を容るゝに足るとあり、如何にも腹が大きく清濁合せ飲むの概があつたさうだ。また聴識以て経綸するに足り、勇往以て決断するに足るとあれば、如何にも聰明叡智を剛毅果断であつたに相違ない。且又最も信義を重んじ慈善心に富み、而もこれ悉く既に之を郷党隣里朋友の間に行ひ国人に施すと副島氏が云ふてゐるから、只漠然たる話ではなく、之を国人に施し之を郷党で行ふた例証が沢山あるのだ。

○

先生また父母に孝に弟妹に友に、母多病なりければ、乃ち幼少の時より能く力を竭して之を助け、往々にして親ら弟妹を負うて門外に出遊し、溪畔に踞して書を読みたこともしばしくなりしとぞ。先生また起臥出入必ず父母を省す。父母歿するに及んでは、忌日必ず墳墓を拜し、終身渝らざりしと云ふ。先生將に没せんとするの夕、悠然として東の方天子の所を拜して曰く、草莽の臣某事畢矣とは副島種臣翁が特筆大書する処である。

○

さて余は、豊川良平に面会した。此度こそ是非とも三菱へ入社して呉れとのこと。実は土佐で貴下の評判が非常に善く、岩崎社長も貴下の如き人物の入社を懇望いたし居れば、政治とか社会改造とかいふ貴下従来の目的を一変し、商業社会に身を投ぜられては如何、且つまた日本の商人社会の有様は甚だ幼稚で、欧米の足元へも寄り附けぬ、政治や社会の状態も西洋に及

ばぬことは勿論であるが、国家の富源をなすべき商業の劣等なることは言語道断だ、此儘で推し行かば、日本は貧乏倒れするであろう、三菱会社は、今の日本商業社会では先づ重なる団体の一つだ、貴下この際三菱に入り、日本商業の発展に大に力を尽されんことを希望すといふが豊川の意見であつた。余はこの豊川の好意を一言の下に撥付た。金儲けだの商売だのといふことは全く予に不適当で、依然たる貧乏武士の子孫といふことを余の誇りとして居ると答へた。

25
[159]

人格者は皆貧乏

副島氏の話が長くなつて御退屈。これといふのも、元来余輩は副島氏が大好きだ。どういふ処を好きかと問はるれば、貧乏して居るから好きなのである。副島氏は何時も貧乏して居た。全体政治家は貧乏して居るが当然で、金を持つて居るは大間違ひだ。何か不義不正の事をせなければ、金の出来る筈がない。藩閥政治家は大概金持のやうであつたが、店卸をしたならば、首が五ツあつても十あつても贖罪が出来ぬほどの悪事を働いたのであらう。権謀術数家とは罪惡を上手に犯すペテン師のことで、敏腕家、辣腕家などと世間に持囃される奴等は巾着切の仲間だ。こんな巾着切りやペテン師が相集まつて政治界を運転し、実業社会を左右して居るから、之を名つけて百鬼夜行でなく百鬼昼行と云ふのだ。今の日本は、全く暗黒の魔海に沈没して居る。此の暗黒の日本にありては、副島氏の如き貧乏主義、即ち高潔主義の人は群鷄の一鶴と称すべく、暗夜の孤燈といふべき

である。余が同人のことを長たらしく御話する素志は実は此辺にあるのだ。板垣も亦副島の如く貧乏主義、即ち高潔主義を固執した人だ。故に前段に於て冗長を顧みず同人を語った次第であります。

井伊直弼は大政治家

詳しく言へば、神陽、副島の兄弟なりとて余はことごとく賛同するに非ず。余の主張する自由、平等、友愛の三主義と彼等の大義名分論とは果して一致するや否。たとへば余は井伊掃部頭直弼を敬愛し、鎌倉幕府創立以降七八百年間、空前絶後の大政治家と評定すると同時に、彼の水戸派は余之を蛇蝎視し、黄門光圀は余之を評して獅子身中の毒虫と断定す。況んや斉昭以下所謂水戸浪人輩に於てをや。ではあるが併し神陽兄弟の水戸に対する意見如何。恐らく余の意見と相容れざるものあるべけれど、議論に亘るは此坐談の主旨ではないから全く之を省略し、余は唯^{ただ}神陽兄弟の人格の偉大なるを賛美し、静聴を煩はしたのである。